

温泉地域研究

第15号

2010年 9月

論文

- 最近の黒川温泉における小規模旅館の動向
 浦 達雄 (1)
- 浅虫温泉郷の現状と課題
 —新幹線時代を迎える本州北端の温泉地の取組み—
 谷口清和 (11)
- 温泉宿泊客の動向からみた観光地域政策の実態と課題
 —山梨県と群馬県を事例に—
 王 薇 (19)
- 桂林龍勝温泉観光開発のSWOT分析及び対策
 鈴木 晶・陳 晶 (29)

研究ノート

- 海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅲ
 進藤和子 (37)

書評

- 布山裕一著：『温泉観光の実証的研究』 浦 達雄 (43)

温泉地情報

- 西伊豆の温泉地 —宇久須温泉— 新田時也 (44)
- 日本温泉地域学会会員温泉関係文献目録 (46)
- 学会記事 (52)

日本温泉地域学会

最近の黒川温泉における小規模旅館の動向

Current Business Trends of Small Sized Ryokan (Japanese Style Inn) in Kurokawa Spa, Kumamoto Prefecture

浦 達 雄*
Tatsuo URA

キーワード：黒川温泉 (Kurokawa spa)・温泉地 (spa region)・小規模旅館 (small sized ryokan:Japanese style inn)・経営動向 (business trends)

1 はじめに

(1) 研究の背景

熊本県黒川温泉は、1986年の入湯手形の発行以来、快進撃を続け、2002年度には宿泊客数が39万6,720人に達し、40万人に迫ることになった。しかし、2003年秋、外来資本の経営による旅館がハンセン病患者の宿泊を拒否したことで、マイナス面を強調した形でマスコミの話題にのぼり、イメージダウンをきたすことになった。さらに、入湯手形のマンネリ化もあって、その後、宿泊客は減少・停滞傾向に陥ることになった。2009年度の宿泊客は30万322人で、30万台に留まっており、約10万人の減少をみている。

高度経済成長下においては、大規模旅館を主体として順調な伸びを示した温泉旅館であるが、1973年の石油危機、平成期のバブル経済の崩壊などで経営危機が顕在化することになった。これに対して、安定経済成長期以降、癒し系の温泉地と称される由布院温泉、さらに黒川温泉が注目を集め、小規模旅館でありながら、地域資源を活かした活性化を行い、わが国の新しい温泉ブームを支えた事実は周知の通りである(山村1998、浦2006)。

(2) 研究の目的と方法

研究の目的は、熊本県黒川温泉を調査対象として、小規模旅館の動向を把握し、その将来方向を明らかにすることである。黒川温泉

は癒し系の温泉地としては最右翼に位置付けられ、その動向が注目される温泉地である。幸いにも世間を揺るがしている旅館再生企業の進出もなく、経営的には地元資本を主体とした旅館経営が行われており、その経営姿勢は学ぶべきところが多い。今回は2軒の小規模旅館を取り上げ、おおよその経営数値の把握、企画商品や経営方針などを分析することで、その実態を考察したい。

研究の方法は、旅館の主人や女将に対する詳細な聞き取り調査、黒川温泉観光旅館協同組合など関係機関における聞き取り調査である。なお、ここで言う小規模旅館とは29室未満の旅館を示す¹⁾。

(3) 従来の研究成果

黒川温泉に関する従来の研究成果は比較的多い。しかし、現地調査を通した論文になると、その数は限定されよう(山村1996、浦2001・2004、布山2003・2009)。浦の調査手法は旅館経営者に対する聞き取り調査に主眼を置くもので、細かなデータ分析ではなく、趨勢の把握を意図したものである。

なお、筆者はこれまで温泉地を主体にして小規模旅館の経営動向に関して研究をすすめてきた²⁾。黒川温泉に関しては、2001年と2004年に報告したが、旅館経営の環境は、2008年のリーマンショック、2009年の新型インフルエンザの世界的な流行もあって、当

*大阪観光大学観光学部 (Osaka University of Tourism)

時と大きく異なっており、現在の方がその経営は厳しい。本稿では現地調査による実態把握と共に今後の方向性についても明示し、経営者の要望に応えたい。

2 入湯手形の発行とその後の展開

(1) 入湯手形発行前の黒川温泉

表1は、黒川温泉の年表である。

表1 黒川温泉の年表

1706年	宝永3年。井沢蟠龍『肥後国誌』に熱湯井腐湯として黒川温泉記載。
1752年	宝暦2年。御客屋創業。
江戸時代	街道筋の温泉場として機能。参勤交代の際は大名一行が宿泊。
1867年	慶応3年。湯本荘創業。
明治・大正・昭和戦前	近隣の湯治場として成立。
1960年	ふもと旅館、温泉の人工掘削。
1961年	2月9日。旅館組合設立。
1964年	6月8日。国民保養温泉地指定。 10月3日。やまなみハイウェイの開通。
高度経済成長期	一時期、観光客が入り込む。しかし、ブームは数年で終了。露天風呂を整備した新明館だけが継続的に繁栄。
1975年頃	各旅館、2代目に世代交代開始。
1985年	細川護熙知事、「日本一づくり運動」提唱。 7月。若手グループ、長野県野沢温泉研修。
1986年	5月。入湯手形の発行（露天風呂めぐり開始）。現在、手形は1,200円で、3ヵ所入湯可能。
1987年以降	看板の統一、雑木の植林開始。 風を活かした地域づくり（風土・風景・風習）。
1988年	女将の会設立。
1989年	ふもと旅館、セルフペンションBR開業（別館ブームに先鞭）
1993年	3月。風の舎（新組合事務所）開設。組合設立35周年記念。
1998年	じゃらん（九州・山口版）の人気観光地調査で1位を占める。
2000年	5月。熊本日日新聞情報文化センター制作『黒川温泉「急成長」を読む』熊本日日新聞社、224頁、発行。
2001年	9月。黒川温泉に勤めている方のための温泉めぐりスタンプカード発行
2003年	3月末。2002年度宿泊客数は39万6,720人（ピーク）。 11月。アイレディース宮殿黒川温泉ホテル、ハンセン病元患者宿泊拒否。 平成15年度地域づくり総務大臣表彰。
2006年	黒川温泉の名称を地域団体商標登録（地域ブランド）。
2007年	8月。入湯手形の販売200万枚突破。
2009年	3月7日。まにあ道「黒川温泉道場」開設。 3月16日。「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」発売。黒川温泉が二つ星で掲載。 4月1日。平野台高原展望所（通称：恋人たちの丘）が恋人の聖地に認定。 7月。ふもと旅館、110cmロングタオル発売。里の湯和らく、新規開業（11室22人収容）

2009年	7月17日。「ハイサービス日本300選」選定。 8月8日。ふじ屋、スペース店開業。各旅館、3代目に世代交代開始。
2010年	3月末。2009年度宿泊客数は30万322人。 8月1日。こども入湯手形発売。

(注) 各種資料により作成。

黒川温泉の歴史は古く、藩政期までさかのぼる。街道筋の温泉地として参勤交代の大名や旅人が入浴したという記録が残されているが、詳細は定かではない。しかし、明治・大正・昭和戦前の時期は湯治場として機能し、何の変化もなく高度経済成長期を迎えるに至った。ところが、1964年6月11日、国民保養温泉地の指定、続いて1964年10月3日のやまなみハイウェイの開通を契機として大量の観光客が入り込み、それを前後にして旅館の新規開業や増改築が進み、黒川は湯治場から脱却したのである。だが何の変哲もない山間の温泉地の観光ブームは数年で過ぎ去り、その後、低落傾向を示すことになった。

(2) 入湯手形発行後の黒川温泉

1975年頃になると、都会で働いていた旅館の子息が帰郷し始め、旅館経営者の世代交代が発生した。こうした若手経営者を中心として、停滞していた黒川の振興策について協議が重ねられ、新事業に対する取り組みが行われた。その代表策が1986年5月の入湯手形の発行である(熊本日日新聞情報文化センター2000)。

当初、19軒の旅館が自館の風呂(その内、露天風呂は16軒)を開放し、日本で初めて組織的に外湯客を受け入れて話題となった。参考にした温泉地は、1985年7月に若手グループが研修で訪問した長野県の野沢温泉であった。

入湯手形の発行に際して、「1人はみんなのため、みんなは1人のため」という基本理念を確認し、組合活動のオープン化と周辺環境の整備を組合活動の2本柱にすえて、総務

部と環境部を設置し、組織を再編したのである。

入湯手形による露天風呂めぐりのシステムの根底にあるのは、黒川温泉を1つの「旅館」と位置付け、1軒1軒の旅館という「部屋」が、道路という「廊下」でつながれているという「共生・共同体意識」である。高度経済成長期で繁栄して温泉観光都市まで登りつめた温泉地には、自分だけ良ければ良いという発想で、旅館の大規模化・デラックス化が進展したが、黒川の場合は、自分だけ良ければ悪いという逆の発想であった。

ところで、入湯手形のアイデアは、ふもと旅館の女将の発案と言われている³⁾。女将は、神戸の大学に在学中、日本各地を旅行し、観光地の土産品である通行手形に興味を持ち、岐阜県の平湯温泉では露天風呂めぐりを体験したのである。父のすすめで、1980年、黒川温泉のふもと旅館に嫁ぎ、婚姻の話があった時に地図帳を開くと、黒川温泉の地名は存在せず、驚いたのである。

1982年、NHKの取材スタッフが旅館に宿泊し、地域全体だと取材が出来るという話を聞き、地域全体でのセールスを意識するようになった。当時の黒川温泉は、露天風呂を有する新明館が宿泊客を集めており、これもヒントとなった。そして、宿泊した旅館以外でのもらい湯の慣習などもあって、風呂めぐりが地域全体の情報発信になると思い、夫や女将達と話し合った結果、1986年に入湯手形の発行となった。

黒川温泉の活性化には、1983年に初当選した細川護熙県知事の政策が影響している。

同知事は1985年に「日本一づくり運動」を提唱し、これを意識して「日本一の露天風呂めぐり」を目指したのである。雑木の植林運動については、「日本一づくり運動」の一環としての「緑の三倍増計画」がバックボーンとなった。高度経済成長によって画一化した日本のまちなみを嘆き、「熊本らしい田園文化圏の創造」を目標に掲げたのである。

こうした政策を背景として、1987年以降、看板の統一・雑木の植林が始まり、環境整備事業を推進することで、山間の素朴な田舎の風景を演出するに至ったのである。その根底の考え方は「風」をテーマとした環境整備である。風とは風土・風景・風俗で、言葉を変えれば郷土色・地域性・ローカルカラーである。温泉集落に雑木を植える運動がその代表例である。熊本県当局の補助金を87年から3年間活用して、旅館経営者が率先して実施したのである。

この雑木を植える運動は旅館経営に意外な効果を発揮した。その1つが旅館の建物の色彩である。従来の屋根はレッド・ブルー・グリーンなどが目立ったが、しだいにブラックが中心となって、周囲の環境(グリーン)とマッチし、結果として集落全体が落ち着きある景観を演出することになった。建物の屋根の色が決まれば、外壁・柱・部屋の障子などの色も自ずと決められ、外壁はブラウン系、障子はホワイト系で、民芸調やふるさと調の旅館が大勢を占めることになった。

その結果、黒川は閑古鳥が鳴く温泉地を克服し、旅行情報誌「じゃらん」の九州・山口地方における人気観光地調査で1998年から5年連続1位を占め、その人気は不動のものとなった。その後、入湯手形は、全国の温泉地に普及し、黒川温泉の果たした功績は実に大きい。

黒川温泉の優れた点は、入湯手形を観光客のみを対象としたのではなく、従業員にも広げたところに奥の深さがある。2001年9月には、黒川温泉に勤めている方のための温泉

めぐりスタンプカードを発行し、従業員に対して、入湯手形という黒川最大の観光商品の周知徹底を図ることになった。

3 旅館経営の実態

(1) 旅館業の展開

黒川温泉観光旅館協同組合の資料によれば、2010年4月現在、屋号を掲げて営業を行う旅館数は28軒(収容人員1,937人)を数える。図1は、黒川温泉中心部における旅館の分布を示したものである。

規模別に整理すると、「29室以下」26軒・「30～79室」2軒・「80室以上」0軒となる。これによると、小規模旅館の軒数は93%を占めている。10室以下の旅館も5軒と多い。黒川温泉の特色として、別館の経営があげられるが、22の法人が24軒の経営を行い、4軒が別館扱いとなっている⁴⁾。

最大規模は三愛高原ホテルで、64室・250人収容、以下、湯峡の響き優彩55室・230人収容、旅館奥の湯26室・124人収容と続き、お宿玄河4室・12人収容が最小規模となる。全体的には、客室10数室、収容50人前後が平均的な規模となろう⁵⁾。

黒川温泉の旅館経営は、大資本が少ないのが特色である。外来資本の大手としては、1967年開業の三愛高原ホテル(東京・リコー三愛グループ経営)、1983年開業のアイレディース宮殿黒川温泉ホテル(東京・㈱アイスター経営。2004年廃業)があり、地元資本以外では、黒川荘・ふじ屋・お宿玄河(旧九峯館)など大分県出身者の旅館経営も散見される。

(2) 別館の経営

別館経営は旅館規模の拡大によって経営拡大を目指したものであり、具体的には、次の通りである。山の湯新明館(1902年開業)→旅館山みず木(1989年開業)、お宿玄河(1957年)→里の湯和らく(1999年)、いこい旅館(1962年)→お宿野の花(2000年)、ふじ屋(1972年)→お宿のし湯(2000年)、ふもと旅館(1955

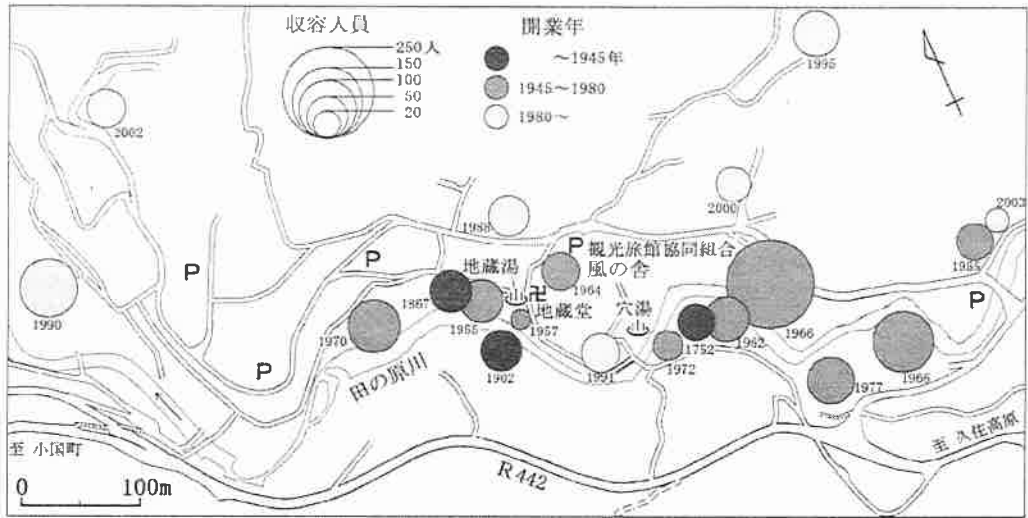


図1 黒川温泉中心部における旅館の収容人員と開業年(2010年)

(注) 黒川温泉観光旅館協同組合の資料により小堀貴亮作成。地図中の数字は開業年。

年)→旅館こうの湯(2002年)、夢龍胆(1966年)→夢龍胆花泊まり(2003年)である。

その他では、敷地内に、旅館松乃井(1989年)→離れ樹やしき(2002年)、黒川荘(1990年)→別館温もりの宿(1995年)が開業している。

別館ブームの先鞭は、ふもと旅館が1989年に開業したセルフペンションBRであるが、これは旅館の敷地内であり、現在は本館の別棟扱いとなっている。郊外型としては、山の湯新明館が奥黒川で1989年に開業した旅館山みず木が最初となった。高度経済成長期の温泉旅館は高層化による客室規模の拡大を目指したが、黒川では別館形式での経営規模の拡大を行い、これが黒川らしさとなった。屋号の変更としては、九峯館(1957年)→お宿玄河(2003年)、富士屋(1972年)→ふじ屋(2003年)などがある。

4 A旅館の事例

(1) 概要

A旅館の概要は表2に示す通りである。17室の小規模旅館ながら、客室や料理のレ

ベル、温泉施設などはトップクラスに属し、別館は高品位旅館として知られる。

(2) 温泉施設の整備

A旅館の創業は1955年で、買収によるものである。1960年には、新規源泉掘削を黒川で初めて行った。1980年、二代目主人が結婚し、福岡県大牟田市から大学の経済学部を出た女将を迎え、新しい視点での旅館づくりが行われることになった。何度となく改装を行ったが、1986年に始まった入湯手形による露天風呂めぐりに対応する形で、1985年には湯小屋(男性露天風呂と内湯など)を整備し、1989年には別館ブームに先鞭をつけたペンションBRを開業した。その後、温泉施設の整備を進め、現在では15に及ぶ温泉施設を付帯する。

露天風呂めぐりでの街歩きに対応する形で、2003年には川端通りにパティスリー麓を開業し、現在ではロールケーキが黒川を代表する名物に成長している。客室は17室で、収容人員は50~60人を示す。

現在の年商は約1.8億円で、ピーク時である2004年の2.4億円に対して減少したが、

表2 A旅館の動向

<p>(1) 旅館の歩み</p> <p>① 1955年：開業(買収)。 ② 1960年：新規源泉掘削。 ③ 1980年：二代目結婚(現在の主人と女将)。 ④ 1985年：湯小屋整備。 ⑤ 1986年：入湯手形スタート。 ⑥ 1989年：ペンションBR整備(99年別館)。 ⑦ 1999年：客室の改造、家族風呂の新設。 ⑧ 2000年：客室の改造。 ⑨ 2002年： 客室の改造、女性専用露天風呂の新設。 ⑩ 2003年： パティスリー麓(川端通り)開業。(ロールケーキが人気) ⑪ 2003年： 4月。別館「この湯」経営(高品位旅館)。 客室は9室。 ⑫ 2003年： 8月。この湯で森の湯(露天風呂)整備。 ⑬ 2004年：年商2.7億円(7月期)(ピーク時)。 ⑭ 2009年： 7月。温泉ロングタオル販売開始(110cm)。 ⑮ 2009年： 10月。森の湯の男性露天風呂に立ち湯整備。</p>	<p>(4) 年商と客層</p> <p>① 今期の年商： 約1.8億円(7月期)。宿泊部門98%・日帰り部門2%。この湯1.8億円。 ② 平均単価： 宿泊単価1.6万円、消費単価1.7万円。 ③ オンシーズン：8・11・3・10・5月など。 ④ オフシーズン：6・7・2・9・4月など。 ⑤ 宿泊客の市場構成： 熊本県内25%・熊本県外75%。福岡・関東・関西方面が多い。 ⑥ 送客実績： 直(電話)60%・ネットエージェント20%・エージェント20%。 ⑦ 同行者： 同伴60%・家族20%・グループ20%。 ⑧ 宿泊目的： 観光系の宿泊というよりは料理&温泉派の宿泊が多い。</p>
<p>(2) 客室と付帯施設</p> <p>① 建物：木造2階建、現代和風の建物。 ② 面積： 敷地1,485㎡。本館495㎡・別館990㎡。 延床面積825㎡。 ③ 客室： 17室(本館12室・別館5室)。和室16室・洋室1室。収容人員55～60人。 ④ 付帯施設： 食事処7室・売店など。温泉施設は15カ所。源泉掛け流し。男女別の内湯と露天風呂・家族風呂・立ち湯・足湯など。</p>	<p>(5) スタッフと料理</p> <p>① スタッフ： 家族3人(主人・女将・子息)・正社員12人・アルバイト2人。 ② 正社員の内訳： 調理師2人・洗い場3人・フロント3人・客室4人。 ③ 料理商品： 山里の会席料理。2人の場合は部屋出し、グループは食事処の利用。 ④ 名物料理： テーマは四季だが、山菜や肉料理が基本。演出としてはクワ焼きを用いている。牛や馬の肉類は熊本県産、野菜類は南小国町産。自家製の湯豆腐。</p>
<p>(3) 1人当たりの宿泊料金 (1泊2食。2人で1部屋利用)</p> <p>① 平日：1万5,900円～2万100円。 ② その他： 連休・お盆・正月は特別料金を一部で設定。</p>	<p>(6) その他</p> <p>① セールスポイント： 15カ所に及ぶ温泉施設。四季をテーマとした山里会席。 ② 経営方針： 笑顔と親切な接客。スタッフ1人で100人のリピーターの獲得。</p>

(注) 聞き取り調査により作成。経営数値の一部は推定。

ここ数年は適正規模に落ち着いている。送客の内訳は直(電話)60%・ネットエージェント20%・エージェント20%で、ネットエージェントの割合が高まっている。年商の内訳は宿泊98%・日帰り2%で、オンシーズンは8・11・3・10・5月など、夏から秋にかけての月が忙しい。これに対して、オフシーズンは6・7・2・9・4月などで、梅雨と早春、季節の変わり目がやや暇になる。宿泊客の市場構成は熊本県内25%・熊本県外75%で、県外では福岡・関東・関西方面が目立つ。地元の熊本を大切にしたい営業展開を行っている。客層は同伴60%・家族20%・グループ20%の割合で、観光系の宿泊というよりは、料理&温泉派の宿泊が多い。

(3) 山里の会席料理

スタッフは家族3人(主人・女将・子息)・正社員12人・アルバイト2人の構成となる。正社員の内訳は調理師2人・洗い場3人・フロント3人・客室4人を示し、若いスタッフが多い。料理は山里をテーマとした会席料理で、2人客の場合は部屋出しとなる。山菜や肉料理が基本で、演出としてはクワ焼きを用いている。牛や馬は熊本県産、野菜類は南小国町産で、自家製の湯豆腐が人気商品である。

(4) セールスポイントと経営方針

セールスポイントは、質の高い料理と温泉施設の充実にある。川端通りと言う温泉集落の中心に位置し、和風の個室としての魅力を全面に出している。

経営方針は、笑顔と親切な接客であり、スタッフ1人で、100人のリピータを獲得する方針を掲げている。別館はこの湯という高品位旅館であり、A旅館は黒川における旅館経営の成功例と言えよう。

5 B旅館の事例

(1) 概要

B旅館の概要は表3に示す通りである。2003年にスクラップ&ビルドを行い、10月5日に新規開業を行ったが、同年秋のハンセ

ン病元患者の事件と重なり、出鼻をくじかれることになった。

(2) スクラップ&ビルドで屋号を変更

B旅館の開業は1972年で、買収によるものである。2003年10月にスクラップ&ビルドを行い、屋号に平かなを導入した。アルミサッシ無しの木造りの宿を目指し、客室は畳や障子など日本文化を意識した現代和風とした。

旅館の設計に当っては、一流の設計士にお願いしたが、完成版に対して納得が行かず、その後、何度も図面の書き直しをお願いし、やっと完成したのである。アニメ映画の天と千尋の神隠しの一シーンである橋と湯小屋をイメージにして、納得する図面となった。

しかし、外観は木造りだが、内装はモダンをテーマとし、客室は大正ロマンを意識したデザイナーズルームとしたのである。

新築に当っては、従業員の入れ替え、さらには電話番号の変更を行った。従来の客層を乗り越えるために、新規一転の発想であった。現在の客室数は7室、収容人員は22人を示す。旧館時代は10室で、3室の減少となった。現在の年商は約0.7億円である。客室が3室減った分、減少することになった。新規開業にあたって、宿泊料金をアップしたが、事件や景気の停滞の関係で、伸び悩んでいる。

年商の内訳は宿泊90%・日帰り10%で、日帰り部門は会食利用が多い。市場構成は熊本県内5%・熊本県外95%で、県外では福岡・関東・関西方面が多い。オンシーズンは11・8・5月、オフシーズンは2・6・7・9・12月となる。日帰りは11・8・5月が多い。送客の内訳は直(電話)30%・直(ネット)30%・ネットエージェント50%で、エージェント扱いは少ない。客層は同伴が主体で、癒し系や会食系が多い。

2009年8月8日、川端通りにスペース点を開業した。貸しギャラリーとして機能し、黒川の観光文化の拠点を目指すものである。入湯手形による湯めぐりプラスαを意識し

表3 B旅館の動向

<p>(1) 旅館の歩み</p> <p>①1972年：開業（買収）。</p> <p>②1983年：二代目結婚（現在の主人と女将）。</p> <p>③1993年：現在の別館の場所で露天風呂開業。</p> <p>④1997年：食事処よこい家木ベエ開業。</p> <p>⑤2000年： 7月25日。別館「お宿のし湯」開業（高品位旅館）。客室は9室。漆喰造り。</p> <p>⑥2001年： 年商1億円（5月期）。お宿のし湯と合わせて約2.6億円。</p> <p>⑦2003年： 10月5日。スクラップ&ビルドで新築。アルミサッシ無しの木造りの宿、畳や障子など日本文化を意識した客室。外観は木造りだが、内装はモダンをテーマとし、客室は大正ロマンを意識したデザイナーズルーム。</p> <p>⑧2009年： 8月8日。スペース点（川端通り）（ギャラリー）開業。観光の文化拠点を目指す。</p>	<p>(4) 年商と客層</p> <p>①今期の年商： 約0.7億円。宿泊部門90%・日帰り部門10%。のし湯は1.4億円。</p> <p>②平均単価： 宿泊単価1.6万円、消費単価1.7万円。</p> <p>③オンシーズン：11・8・5月など。</p> <p>④オフシーズン：2・6・7・12月など。</p> <p>⑤日帰り：11・8・5月など。</p> <p>⑥宿泊客の市場構成： 熊本県内5%・熊本県外95%。福岡・関東・関西方面が多い。</p> <p>⑦送客実績： 直（電話）20%・直（ネット）30%・ネットエージェント50%。</p> <p>⑧同行者： 同伴50%を主体に家族客やグループが多い。女性の割合も高い。</p> <p>⑨宿泊目的：癒し50%・会食50%。</p>
<p>(2) 客室と付帯施設</p> <p>①建物： 木造3階建（地下1階・地上2階）。現代和風の建物。</p> <p>②面積：敷地500㎡、延床面積は900㎡。</p> <p>③客室： 7室（和室6室・洋室1室）。収容人員25人。旧館時代は10室。</p> <p>④付帯施設： ロビー・書斎・食事処・男女別の内場（半露天風呂付）・家族風呂2ヵ所。</p>	<p>(5) スタッフと料理</p> <p>①スタッフ： 家族2人（主人・女将）・正社員8人・パート2人。</p> <p>②正社員の内訳： 調理師3人・フロント2人・客室3人。スタッフは若い社員が多い。柔軟性があるため、対応が早い。</p> <p>③料理商品： 創作料理で1品出し。食事処利用。テーブル席ではオープンキッチンを採用。調理風景が楽しめる。座敷では1テーブルごとに仕切りを設け、人目を避ける工夫。</p> <p>④名物料理： 鉄板料理・会席料理から選択。会席料理は季節の鍋料理。豆乳鍋・味噌鍋・黒豚のはり鍋・季節の野菜の大皿盛りが人気商品。鉄板料理は赤牛・地鶏など。</p>
<p>(3) 1人当たりの宿泊料金 （1泊2食。2人で1部屋利用）</p> <p>①平日： 13,650円～17,850円。部屋のタイプと広さで料金は異なる。</p> <p>②その他： 休前日は2,100円、5月の連休・お盆は3,150円、年末年始は5,250円プラス。</p>	<p>(6) その他</p> <p>①セールスポイント： 泊まれるレストラン（オーベルジュ）を目指す。一部ではB&Bにも対応。</p> <p>②経営方針： 顧客第一主義。ソフト面の充実。スタッフは家族の一員という考えのもとで総出で送迎などを行う。</p>

（注）聞き取り調査により作成。経営数値の一部は推定。

た施設となった。

(3) 創作料理の一品出し

スタッフは家族2人(主人・女将)・正社員8人・パート2人である。正社員は調理師3人・フロント2人・客室3人で、若い社員が多い。食事処では、テーブル席はオープンキッチンを採用し、調理風景が楽しめることが特色である。料理は鉄板料理と会席料理から選択し、鉄板料理は赤牛・地鶏など、会席料理は季節の鍋料理で、豆乳鍋・味噌鍋・黒豚のはり鍋などとなる。季節の野菜の大皿盛りが人気である。

(4) セールスポイントと経営方針

セールスポイントは、泊まれるレストランである。オーベルジュが究極の目的である。とはいえ、顧客志向であり、B&Bにも対応している。

経営方針は、顧客第一主義である。ソフト面の充実を図り、各種宿泊プランが充実する。HPの「ふじ屋だより」を主体にPRに努めているが、一例として、残暑！特別価格宿泊プラン、入湯手形付！宿泊プラン、川側角部屋お約束！夕食グレードアップ部屋食プラン、湯ったり・のんびり朝寝坊プラン、人数が多いほど、お得なグループプランなどがある。

スタッフは家族一員という考えのもと、総出の送迎などを行う。

6 むすび

本稿では、黒川温泉の活性化の流れを把握し、その後、2軒の小規模旅館を事例として論を展開した。その結果、次の点が指摘できよう。

- ①黒川温泉は入湯手形の発行で、地域の活性化に成功し、その結果、旅館経営が好転した。
- ②力のある旅館は、別館(支店)を経営し、規模の拡大を行った。施設の大規模化ではなく、多店舗化による経営拡大であり、黒川の特徴となろう。

③しかし、2009年度の宿泊総数は30万人に留まり、減少・停滞傾向を示している。とはいえ、現在は適正規模に留まっており、理想の客数と言えよう。

④イメージダウン・景気の後退などで、旅館経営に二極化の傾向が出てきた。従来のように、待ちの経営ではなく、積極的な攻めの経営を展開することで、経営を刷新すべきであろう。

⑤送客はネットエージェントの割合が増加傾向にある。出来れば、都市ホテルのように、自社のHPを活用しての予約が理想と言えよう。

⑥黒川温泉の大半の旅館は、個室・和風旅館・専門店として活路をみだし、日本文化の拠点として機能している。

⑦今後の課題は、温泉資源の保護であり、行政当局は規制を行うことで、資源保護に努めるべきである。

⑧今後の方向性は、持続可能な温泉地を目指し、ロングステイが出来る温泉地として活路を見出し、まちづくりを推進すべきであろう。

注・参考文献

1)筆者は、これまで、小規模旅館(29室以下)、中規模旅館(30室～79室)、大規模旅館(80室以上)と分類して、調査を進めており、今回も前例に従った。国際観光旅館連盟の各種調査では、小旅館30室以下、中旅館31室以上99室以下、大旅館100室以上としている。

2)主な論文は次の通りである。

浦達雄(1992)「温泉観光地における小規模旅館の経営動向」日本観光学会研究報告、24、31～38頁。

浦達雄(1996)「奥能登における観光旅館業の経営動向」日本観光学会誌、28、94～100頁。

浦達雄(1997)「和倉温泉における小規模旅館の経営動向」日本観光学会誌、30、53～58頁。

浦達雄(1998)「別府温泉郷における旅館経営の動向」日本地理学会発表要旨集、53、248～

- 249頁。
- 浦達雄(2000)「21世紀における温泉旅館経営のあり方」地域社会研究(別府大学地域社会研究センター)2、18～27頁。
- 浦達雄(2000)「湯布院温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要開学記念特別号、9～16頁。
- 浦達雄(2001)「山間温泉地における小規模旅館の経営動向—黒川温泉、長湯温泉を事例として—」大阪明浄大学紀要、1、1～10頁。
- 浦達雄(2002)「泉佐野市犬鳴山温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要、2、9～16頁。
- 浦達雄(2003)「南紀白浜温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要、3、7～15頁。
- 浦達雄(2004)「黒川温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要、4、1～9頁。
- 浦達雄(2006)「温泉観光地における個宿の経営動向」大阪明浄大学紀要、6、9～18頁。
- 浦達雄(2006)「別府市鉄輪温泉における和風旅館の経営動向」総合観光研究、5、87～94頁。
- 浦達雄(2008)「別府温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要、8、1～8頁。
- 浦達雄(2009)「城崎温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要、9、1～9頁。
- 浦達雄(2009)「最近の和倉温泉における小規模旅館の動向」温泉地域研究、13、33～40頁。
- 3)ふもと旅館女将・松崎久美子氏の談による。
- 4)能津和雄(2010)「地域における事業協同組合の役割について—熊本県黒川温泉を事例として—」経済地理学会北東支部2月例会(東北学院大学)、口頭発表資料。
- 5)能津和雄(2010)「熊本県阿蘇郡黒川温泉における地域振興への取り組み」2010年度東北地理学会春季学術大会(仙台市戦災復興記念館)口頭発表資料。

参考文献

- 山村順次(1996)「熊本県南小国町黒川温泉の活性化—入湯手形で露天風呂めぐり—」温泉、第64巻9月号、20～24頁。
- 山村順次(1998)『新版・日本の温泉地 その発達・現状とあり方』日本温泉協会、239頁。
- 熊本日日新聞情報文化センター(2000)『黒川温泉「急成長」を読む』熊本日日新聞社、224頁。
- 浦達雄(2001)「山間温泉地における小規模旅館の経営動向—黒川温泉、長湯温泉を事例として—」大阪明浄大学紀要、1、1～10頁。
- 布山裕一(2003)「黒川温泉の観光動向と活性化への取り組み」温泉、第71巻4・5月合併号、10～13頁。
- 浦達雄(2004)「黒川温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要、4、1～9頁。
- 浦達雄(2006)『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』クリエイツ、218頁。
- 布山裕一(2009)『温泉観光の実証的研究』御茶の水書房、339頁。

浅虫温泉郷の現状と課題

—新幹線時代を迎える本州北端の温泉地の取組み—

Present Situation and Problems of Asamushi Spa

谷口清和*
Kiyokazu TANIGUCHI

キーワード：浅虫温泉 (Asamushi spa) ・ 地域振興 (regional promotion) ・
限界温泉地 (limitative spa community) ・ 活性化 (activation)

1 はじめに

J R 東日本：東北新幹線は1982 (昭和57) 年 (大宮～盛岡間) の暫定開業以来、28年を経て2010年12月4日に全線開通 (東京駅～新青森駅間) する。構想・着工以来40年に渡り、新幹線駅舎問題では青森市政が市民を巻き込んで二分する大論争の末、青森市中心部から5km西の郊外に新青森駅 (写真1) を造る事で決着した。東北新幹線全線開通で浅虫温泉郷は新幹線営業最北駅にある温泉地となるが、結果的に現行のJ R 浅虫温泉駅は第三セクター青い森鉄道となり、J R 特急が止まらなくなるという致命的な事となる。本稿では、こうした浅虫温泉郷について、様々な組織が活性化に向けて支援をしている取組み状況とその課題を考察する。



写真1 2010年12月4日に開業する東北新幹線新青森駅
(注) 筆者撮影 2010年8月。

2 浅虫温泉郷の現況

浅虫温泉の特色をキーワードごとに整理したのが表1である。

浅虫温泉は世界の版画家棟方志功が浅虫温泉ポスター用に描いた油絵 (写真2) の中に書き入れた文言「浅虫へ 海も山も温泉も」の通り、鉄道・道路の交通の便も良く、東北の温泉地としては珍しく風光明媚な湾内、海浜と里山の景観 (写真3) を有し、東北の「熱海」とも称されてきた。しかし近年、ふるさと創生資金による一自治体一湯の台頭とともに衰退が著しく、2010年12月4日東北新幹線新青森駅開業後はJ R 特別急行列車が消滅するというマイナス要因を抱えている。

棟方画伯は浅虫湾を一望できる場所でのスケッチがお気に入りであった。原画は棟方志功が滞在した旅館『椿館』の入口に掲示されている。展望台からの眺望は浅虫温泉の特徴である浅虫湾に開かれた温泉場の様子がよく捉えられている。

3 浅虫温泉郷の宿泊客数の推移

ここで、浅虫温泉の宿泊客・旅館・住民の推移を分析する (表2)。

ピーク時から2008年度までの推移では、旅館施設が10軒減少、宿泊者が8万5,000人、およそ30%の減少である (1泊1万2,000円

*温泉地活性化研究会 (Society for the Activation of Spa)

表1 浅虫温泉の特色

交通	JR東北本線が通り・温泉街に特急列車が停車する浅虫温泉駅がある。国道4号線沿線でもあり・鉄道・道路の便があり、県庁所在地青森市内まで車でおよそ20分である。
景観	2半島（下北半島・津軽半島）・3名山（岩木山・八甲田山・恐山）をパノラマ的に眺望でき、むつ湾海浜部（浅虫湾）には4つの島（湯の島・裸島・鷗島・双子島）が浮かぶ景勝を保有している。
食	山海の珍味は言うまでもなく、県産名物食材にも恵まれる。ホタテ・ヒラメ・イカ・アワビ・ウニ・ナマコ・ホヤ・八甲田牛・ニンニク・長いも・りんご・カシス・山菜・名物菓子（くじら餅）etc
温泉	泉質：含石膏・食塩－芒硝泉 {ナトリウム・カルシウム－硫酸塩・塩化物泉} 泉温：52～79℃ PH8.2～8.5 ①山の手中心の浅虫川流域にあり、津軽藩政時代からの湯守の宿を中心とした自家源泉保有式 歴史も古く・頑なほど源泉管理にこだわっている。 浅虫温泉利用組合（推定15井戸：300トン） 椿館（棟方志功の宿：温泉井戸9保有）・柳の湯（殿様の湯：温泉井戸5保有）・双葉荘（民宿：温泉井戸1保有） ②海の手・駅中心・114の源泉を統合した集中管理方式 比較的新しい旅館等が多くの温泉井戸を掘りすぎた結果、泉質維持、湯量維持の必要から日本で最も早く集中管理方式を取り入れた。 浅虫温泉事業共同組合（7温泉井戸：900トン 11旅館ホテル、各施設、個人に配湯） ※大型施設では、当然の如く、循環・塩素消毒・加水・加温等 この2つの温泉水利用形態がそれぞれ異なった湯趣特徴を示し、本論で示される課題要因（組織の膠着・対立）の一つになっている。
施設	県営水族館・海釣公園・海水浴場・ビーチコート・ヨットハーバー・東北大学海洋生物学研究センター（旧水族館）・道の駅ゆへさ浅虫（共同浴場）・森林公園・ホテル湖（ダム湖）・官公署・企業保養所など
組織	浅虫温泉旅館組合・青森観光コンベンション協会浅虫支部・浅虫温泉事業共同組合・浅虫温泉利用組合・浅虫温泉女将の会・青い森ネイチャーガイド協会・浅虫町会など

（注）浅虫温泉地域活性化懇談会アドバイザーとしてデータ収集、作成。



写真2 浅虫温泉のキャッチコピーとなった棟方志功のポスター
 （注）筆者撮影 2010年5月。



写真3 浅虫温泉郷の遠望
 （注）筆者撮影 2009年10月。

表2 浅虫温泉の宿泊客数・旅館数・人口の変化（1991～2008年）

年 度	宿泊客数(人)	旅館数(軒)	収容人員(人)	町民数(人)	時代背景
1991(平成3)	294,809	24	2,307	—	バブル景気後半
1993	250,947	23	2,204	2,323	バブル崩壊
1998	256,257	21	2,100	2,217	
2003	285,051	18	2,013	1,825	東北新幹線 八戸駅開業
2003～2008	(2003年から2008年にかけて毎年15～20千人の宿泊客減少)				
2008	210,065	14	—	1,676	原油高騰：宮城・ 岩手県境地震

(注) 浅虫温泉旅館組合・浅虫町会提供の資料により作成。

とすると約10億円の収入減)。注目すべきは、ピーク時でさえ稼働率（年間宿泊客数/年間収容人員）が35%と温泉地そのものが施設過剰気味であり、最近の稼働率30%はもはや旅館ホテル存続の限界値であることである。

その証左に1998年頃から、小規模温泉宿（温泉芸者遊宿）が脱落し、ついには、2009年、中規模で浅虫温泉郷を代表する老舗『ホテル松園』（45室120名）が突然廃業にいたった。そして、2010年も大規模ホテル『海扇閣』（89室390名）が外部社長（鴨川温泉にある温泉ホテルグループより派遣）を招聘するなど当温泉地経営の緊張が続いている。今後、東北新幹線全線開業に向けて、相当な誘客パワーが無ければ旅館ホテルの淘汰が劇症的に進行する事が予測される。

浅虫地域の人口は1998年から2003年にかけて400人の減少を示した。背景にはバブル崩壊の余波を受けての旅館・施設の減少が原因としてあげられる。特筆すべき事は、2003年には町民数よりも旅館・ホテルの収容人員数が多いという浅虫温泉始まって以来の現象となった。ついに2008年度時点での年齢構成比では55歳以上の住民が50%を越え、浅虫温泉集落が「準限界集落」と認められるに至ったのである。すなわち、限界集落とは過疎化などで人口の50%以上が65歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭など社会的共同生活の

維持が困難になった集落のことを指すが、55歳以上が50%以上の場合、準限界集落と表現され、浅虫温泉集落は準限界集落とされるのである。

4 浅虫温泉郷活性化支援状況

浅虫温泉は県庁所在地青森市の奥座敷として、古くからの温泉地である事から、青森県・青森市・青森公立大学・青森工業高校・青森商工会議所・青森市観光レクリエーション振興財団（道の駅浅虫温泉ゆ～さ浅虫）と任意団体等の官・産・学・民が其々の立場で支援を実施してきた（表3・表4）。

この様な、浅虫温泉当事者以外の活性化支援は、資金投下は勿論、ワークショップや事業共同実施などで支援当初は温泉地当事者と支援団体双方とも盛り上がりを見せるが、問題は支援団体が引き上げた後である。もちろん、浅虫温泉の当事者も一生懸命自分達の為すべき事を模索しているが、支援を受けた後のソフトマニュアルが、支援者が期待したとおりには整備・運用されていないのが実態である。それは、支援を受ける側が、これまでの体制、限られた人数で、決まった事だけを行うとしたら当然の事で、支援を契機に事業の見直し・転換・効率化など、折角のチャンスを自分達のものとする実践作業に欠けていた事に一因がある。

人手が足りないなら、①既存の組織を見直

表3 浅虫温泉における最近の主な支援組織と事業 (2007～2010年)

支援先	支援事業	支援内容	講師
青森商工会議所：2007年～	浅虫温泉地域活性化懇談会【活性化支援】	活性化支援総合	観光カリスマ (JTB常務) 清水 慎一 観光カリスマ 鶴田浩一郎 (別府温泉：ホテルニュートルガ社長)
青森県商工労働部 経営支援課：2007年	観光ベンチャー 創出事業	観光ビジネス ワークショップ*	青森公立大学教授 佐々木俊介 NPO 推進会議 小笠原秀樹
青森県東青地域 県民局：2009年～	温泉プロデューサー 育成事業	人材育成	温泉評論家 石川 理夫 景観アドバイザー 堀 繁 (東京大学教授) 温泉ビューティ研究家 石井 宏子 温泉地研究家 谷口 清和
青森県県土整備部： 2009年～	電線地中化	景観形成	景観アドバイザー 堀 繁 (東京大学教授) 観光カリスマ 佐藤 雄二 (小野川温泉：河鹿荘社長)
青森公立大学： 2009年～	地域貢献事業	活性化支援	青森公立大学教授 吉原 正彦 他ゼミ生十数名
青森工業高校： 2009年～	地域貢献事業	活性化支援	温泉地研究家 谷口 清和
温泉地活性化研究会： 2006年～	温泉塾・温泉検定・ おんせん湯守士認定 事業	人材育成	看護師 舘田 菊子 医師 (温泉療法医) 津川 信彦 温泉地研究家 谷口 清和

(注) 浅虫温泉地域活性化懇談会アドバイザーとしてデータ収集作成。

表4 浅虫温泉活性化支援実績一覧 (2007年～2010年)

該当種別 (設置団体)	項目名
おもてなし商品メニュー作成：冬の観光 (浅虫温泉地活性化懇談会)	スノシュー里山トレッキング・金魚ネプタ 製作体験・津軽凧体験・リース製作体験・ 藁草履製作体験・庭ねぶた鑑賞・竹スキー 体験・かんじき体験・水族館裏メニュー等
温泉利用 (浅虫温泉温泉事業組合)	飲泉所・温泉卵場設置：2箇所
案内板整備 (浅虫温泉地域活性化懇談会)	源泉公園・森林公園などのトレッキングコース 整備：案内板・標識の設置
電線共同溝整備 (県土整備部)	メインストリート電線地中化・景観整備
案内標識設置 (浅虫温泉地域活性化協議会)	浅虫温泉散策ルート案内標識：7基設置
湯の街サロン (浅虫町会)	町民会館の解放：休憩・懐古写真展等
浅虫温泉ガイドブック作成 (青森公立大学)	ガイドブック全5巻作成：全旅館に配布
歩行者天国試行 (浅虫温泉地域活性化懇談会)	浅虫温泉メイン通り夏祭り実施
人材育成事業 (温泉地活性化研究会)	あおもり「おんせん湯守士」：26名認定
先進温泉地視察 (浅虫温泉地域活性化懇談会、 東青県民局、県土整備部)	湯の川オンパク・鳴子・銀山・あつみ・小 野川の各先進温泉地視察実施

(注) 筆者が浅虫温泉地域活性化懇談会アドバイザーとしてデータを収集、作成。

ししてパワーアップを図る、②観光事業従事者（組織事務局職員）の意識改革を図るなど、温泉地全体として、生き残りの手段を講じなければならない。折角の支援でありながら、支援を受けるほうも、支援をしたほうも、時間と資金を費やした結果、不満足といった状況が存在する。この不幸な徒労感が、本論のテーマに大きく関わっている。

それ以前のハードとソフトの提供も多いが、それは現在保有施設（表1の施設参照）から類推できよう。表3と表4を分析して、浮かび上がるのが、浅虫温泉の直接の観光行政窓口である青森市の関わりが薄いという事である。青森市が浅虫温泉に全く関与していないかと言うと、そうでもない。夏の花火大会や海釣り公園の維持管理など既存の施設運営には関わっている。つまり、ハード・定型分野の関わりである。これから生き延びるための人的パワーアップの部分についての支援は、前掲の青森市以外の団体なのである。これもまた、我が国で元気とされている温泉地には見られない現象である。先進地視察をしたあつみ・小野川・銀山・鳴子・湯の川温泉などでは、活性化に具体的に関わった方々は、県でも、商工会議所でもない。末端行政の観光担当者、もしくは温泉関係者自身である。

浅虫温泉は二人三脚する相手、一緒に汗をかくべき組織が若干違ふところに大きな問題がある。

5 支援に対する浅虫温泉郷の姿勢

浅虫温泉の長期低落にかんがみ、繁盛時代をおもわんばかりに、県都青森市のそれぞれの組織が精神的・物質的応援と支援を実施してきた。青森県内他の温泉地には見られないほどの活性化資源が投入されて来た。しかし、その結果、地域としての主体性という大事な物が失われた。

当地温泉宿のご主人の頑張りに反し、温泉旅館組合、観光コンベンションなどの基幹組織職員が膠着化し、外部支援に依存しながら

も、新たな取り組み姿勢が希薄である。いわゆる、業務の定型化・停滞化現象である。また、外部の支援を素直に受け入れない雰囲気も見受けられる。

2007年、伊豆稲取温泉では稲取温泉観光協会事務局長を公募し、見事成功した事例もある。低迷する温泉地では、このような人的資源の公募という形が広まりつつあるが、当地浅虫温泉においてはどうかであろう。外部からの人材登用も考えられるが、地域が準限界集落という事実にかんがみ、今ある資源と人材で最大限の効果を引き出すのが先ず大切であろう。

それゆえ、現在の旅館組合事務局と観光コンベンション協会浅虫支部事務局などの既存組織の大奮発を促したい。すでに様々なアイデアや商品材料が提供されてきた。東北新幹線全線開通と新青森駅開業は、浅虫温泉に具体的に何もしてくれないが、こうした人的停滞を打破する好機となり得る。既存の組織の再編成を含め、浅虫温泉地域の関係者が、自ら意識と組織を大改革し、停滞からの脱却を図るしかない。

2010年6月からは、青森観光コンベンション協会浅虫支部が雇用対策補助金を活用し「おもてなしスタッフ」6名を臨時雇用し、観光事業を展開している。本事業により、おもてなしスタッフの積極的な観光案内、空き店舗利用の観光拠点、源泉公園無料休憩所開設などこれまでの閉塞感が改善されてきている。しかし、この事業も2年限りなので、前述の通り事業が進行している時は盛り上がるが、その後継承される対策が肝要である。

6 支援団体・温泉地活性化研究会による新たな試みに対する現地の反応

一般的に自らの変革と組織の大改革は簡単にはできる事ではない。しかも準限界集落型温泉地であるとしたら、若年層による活性化もますます容易な事ではない。このような状況

下で、2010年1月に浅虫温泉で実施され、問題解決の糸口につながるとして注目されるのが、「あおり温泉検定」と「おんせん湯守士」の認定事業である。様々な支援事業に受動的な浅虫温泉の関係者が興味を示し、自主的に参加した「おんせん湯守士」認定事業は、「温泉地活性化研究会（注3参照）」が実験的に推進するもので、青森県内各温泉地で実施を目指し、2011年は青森県県南（上北・十和田）で予定されている。

本事業の特徴は、「温泉検定」と「温泉ガイド資格認定」を組み合わせたもので、温泉・観光・おもてなし・医療の知識を問い、あわせて、温泉塾・セミナー開催による学習講座を数度開催し、試験の成績と講座単位で資格認定をする仕組みである。試験問題・講座・認定業務などの運営には温泉地域の方々にも参画して頂き、支援グループが主体となりながらも、地域参加型（表5参照）を取り入れているところである。

同研究会は日本温泉地域学会第1回温泉観光士養成講座で誕生した温泉観光士が代表を務め、メンバーには医師（温泉療法医）・看護師（ケアマネージャ）・環境計量士（泉質鑑定）・行政マン・金融マンなどの専門家が在籍しているが、このような取組みを可能とした同会の活動経緯は表6に示した。本取組

みは未だ実証段階であり、これからが浅虫温泉の血肉になるものと思われるが、自ら温泉知識への挑戦を始めたという点が、大きなステップアップと捉えられる。「おんせん湯守士」認定講座などで自己啓発をし、温泉スキルの向上が期待される。

日本温泉地域学会の定時学会・総会、「温泉観光士養成講座」などに啓発された代表が、自分達が関わる温泉地の活性化、温泉文化の発掘・保存を目的に温泉地活性化研究会を2003年に結成。「温泉は地球の素敵な贈物」を合言葉に、北日本を中心に温泉検定・温泉講話・温泉塾・温泉セミナー・温泉フォーラムなど開催している。2009年に実施した温泉検定では、成績上位者50名を「おんせん湯守士」に認定育成し、地域温泉関係者の温泉知識の向上、おもてなしマインド醸成を目標に活動している。今後、上北「おんせん湯守士」、下北「おんせん湯守士」の認定を企画、青森県内温泉地の新たな担い手の発掘育成・ネットワーク化を目論んでいる。

7 課題と解決への方策

(1) 浅虫温泉郷の課題

本論では、近年論じられている「限界集落」を山村集落から温泉集落に分析手法を転じて、①温泉集落地人口構成比『準限界集落』

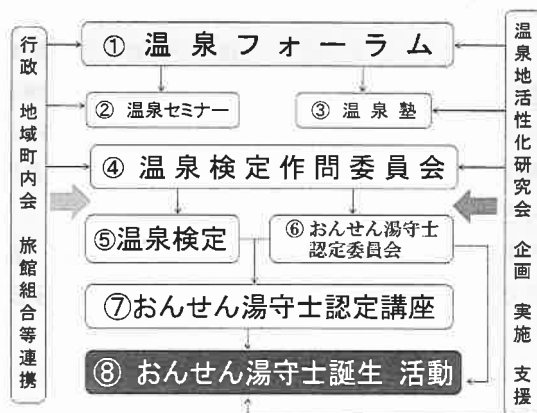


図1 温泉地活性化研究会の地域人材育成事業・「おんせん湯守士」のプロセス
 (注) 温泉地活性化研究会資料。

と認定される（55歳以上が50%を越える）、②年間総施設稼働率50%以下（浅虫温泉は30%である）、③地域住民が温泉地収容（宿泊）人員を割り込むの①～③が2つ当てはまる温泉郷を「限界温泉地」候補とした。さらに、④慢性的施設過多、宿泊客数減、⑤進行する温泉郷地域人口減少・高齢化、⑥外部活性化支援諸施策の非実行性などを勘案し、浅虫温泉郷を「限界温泉地」と認識するものである。

これまででは、漠然と衰退する浅虫温泉を何とかしたいと様々な組織が支援してきたが、これでその支援行動要因が明解化された。浅虫温泉郷は限界温泉地なるが故に、多くの機関が危機感を持ち、支援が集中したのである。

その結果、温泉宿の経営者陣の努力にも関わらず、いつのまにか浅虫温泉地そのものが主体性を失い、依存体質になってしまったのではないか。

また、管轄行政機関（青森市）は残念ながら、結果的に一緒に行動する機会が近年無かったため、次第に温泉地は孤立し、ハード支援、資金支援に依存する体質に陥った。

ハード支援・資金支援はあくまでも一過性であり、永遠ではない。この事を支援する側も、支援される側も認識しているのであるが、体質を改善できずに今日に至ってしまったのである。現在進行している「おもてなしスタッフ」事業も資金支援の範囲内なのである。

東北新幹線新青森駅開業後は、首都圏（全国）に「北国志向」を巻き起こす可能性があり、浅虫温泉が「限界温泉地」を脱却する最後のチャンスであり、最大のビジネスチャンスである。この「北国志向」を追い風にこれまでの支援で蓄積された物的・質的・人的誘客資源を最大限に活かし、新たな商品（浅虫温泉郷本来の魅力・景観・温泉等をリニューアル）を徹底した「おもてなしの心」で再活性化することが大切である。浅虫温泉の魅力を生かすことにし、特性を強め、本州北端の「湾岸

温泉地」として、おもてなし誘客を地域一体で取り組む事が課題と考える。

（2）課題解決への方策

課題解決のためには地域関係者の「良きパートナーとの真摯な取組姿勢」に加え、「積極的な自己革新」、さらには「徹底したおもてなしマインド保有」が鍵となる。

具体的に、浅虫温泉郷に対して次の3つの方策を提示する。

①「積極的な自己革新」を促進する。

外部支援組織、温泉地の基幹組織がこれまで関わってきた全事業を温泉地の方々が自ら整理・精査し、本当に「必要」で且つ「機能的」であり、「身の丈」にあった事業・組織に再編成する。好景気時代、当局の指導のままに作った組織・団体を前向きに整理・統合する。例えば「〇〇〇温泉観光協会」または「NPO法人〇〇〇温泉観光推進会議」などが考えられる。新たな組織を作るのではなく、いかに既存の組織を整理統合し、時代に見合った機能的・機動的な組織に一本化するかという事である。温泉地の方々の英知と決断が必要である。

②「徹底したおもてなしマインド」を醸成する。

自分達の温泉、自分達の観光資源について自ら「語り部」となり、お客様に温泉地の一人ひとりが丁寧に説明できる事である。さらにはお客様に心から「ありがとうございます」と言葉と身体で表現できる事が大切である。その為には、前出の「おんせん湯守士」のような制度を活用し、地域民が自ら資格（ブランド）を創り上げ、自己研鑽し自己発露することが出来る仕組みづくりが必要である。

③「真のパートナーとの良き関係」を再構築する。

浅虫温泉は青森市にある温泉地である。市当局はこれまで物心両面で浅虫温泉を支えて来たのは事実である。しかも、なぜ今回挙げられるように、県や外部の組織が

支援を続けてきたのであろうか。その疑問は浅虫温泉郷に関わってきた多くの方々が思ってきた事でもある。人間で言えば親兄弟の関係は年月を経ても変わらない。浅虫温泉の真のパートナーも、この永遠に変わらない関係でなければならない。担当が代わるたび、組織が変わるたびに、温泉経営者が孤立感を深めてはいるのではなかろうか。双方の当事者はこの現象を自己検証し、真の有るべきパートナーの関係を再構築すべきである。お互いを避けてはならないのである。その上で、県やら、会議所やら、任意団体などの支援が活きてくる。

最後に、本論課題に対する解決策の指針として、久保田美穂子の次の一文が参考となる。

「…課題は温泉地の外にあるのではないということ。…そこに住む人にとっての温泉地の存在意義を自ら見つけ出し、そして自分達

が行動する。…旅館経営者をはじめとする地域の人々の自助努力しか、温泉地を良くしていく方法はないのである」。まさに、本論の課題解決策に対する未来予言であり、我々研究者にも示唆に富むもので深く同感する。

参考文献

- 青森県環境保健部自然保護課編(1997)『青森県温泉地質誌』青森県、535頁。
- 赤坂憲雄編(2003)『日本再考、地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社、387頁。
- 石川理夫(2003)『温泉の法則』集英社、221頁。
- 谷口清和編(2004)『地域(温泉地)に内在する資源の発掘・活用による地域再生の調査研究』温泉地活性化研究会、51頁。
- 大野晃(2005)：『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会、300頁。
- 久保田美穂子(2008)：『温泉地再生』学芸出版社、207頁。

温泉宿泊客の動向からみた地域観光政策の実態と課題 —山梨県と群馬県を事例に—

Actual Situation and Problems of Regional Tourism Policies from Trends of Lodging Guests in Spa — A Case Study of Yamanashi and Gunma Prefectures —

王 薇*
Wei WANG

キーワード：山梨県 (Yamanashi prefecture)・群馬県 (Gunma prefecture)
温泉宿泊客 (lodging guests in spa)・地域イメージ (regional image)
地域観光政策 (regional tourism policy)

1 はじめに

(1) 研究の背景

現代日本における観光を取り巻く環境は、21世紀に入って大きく変貌を遂げている。具体的には、余暇需要の変化・国際交流の進展・シニア市場の拡大・旅行形態の多様化(体験学習型観光など)などである。こうした環境変化に対応すべく、観光においても国内外において国家間・地域間競争が激化してきた。

ところで、温泉は古くから日本の観光資源であり、温泉地が長い間日本を代表する観光地として機能してきた。国際観光振興機構が中国で配布する観光パンフレットの表紙にも若い女性の温泉入浴シーンが扱われている。温泉はまさに日本観光の看板といえる¹⁾。

そこで、日本における温泉観光地を事例として、地域間競争の実態究明、さらには、その問題点と課題・改善方策を検討する意義は大きいと思われ、本稿をまとめた。

(2) 従来の研究成果

温泉地域に関する研究の中心は、観光地理学が担ってきたと言えよう。1970年代以降、温泉地研究を主体として観光地理学の研究成果は急増し、その結果、研究の手法は分布論・

形態論から構造・機能論を重視する研究へと変化してきた²⁾。

他方で、地域政策学の視点からは温泉地の過去・現在を踏まえ、地域の未来像を描く地域観光政策研究が進みつつある。近年、政策研究に携わる地理学研究者の数は増加傾向にあるが、社会との接触や政策面へのアプローチはまだ弱いといえる。しかし、政策関連既存科学を止揚した新しい政策科学を構築する際、観光を広い視野から客観的に見てきた地理学が、地域政策研究に果たす役割と意義は大きいと考えられる³⁾。そこで、本研究では、地理学に基づく地域政策的視点から温泉地に関する地域間競争の研究をするものである。

個性的な伝統的温泉地に行く観光客の減少傾向に歯止めを掛けるため、戸所は地理学に基づく地域政策的視点で、伊香保温泉観光地の活性化について中心街、ホテル旅館経営者の意識、パーク・アンド・ライド・システムの構築方策について論述している⁴⁾。筆者は中国の温泉地との連携による伊香保温泉観光地への中国人観光客誘致政策を研究した⁵⁾。

(3) 研究の目的と方法

従前の政策研究には、温泉地自体に注目し

*高崎経済大学大学院生 (Graduate School of Takasaki City University of Economics)

た研究が多い。しかし、地域観光政策としては研究対象を個別温泉地のみでなく、県域全体を扱うなど広域の視点での研究が必要であると考えられる。広域の視点で研究すると、本稿で扱う東京大都市圏からほぼ等距離の群馬・山梨両県の温泉資源には明らかに格差が見られる。すなわち、山梨県に比べ、群馬県には日本で最も人気のある温泉地の草津をはじめ、伊香保・水上・四万など温泉資源が豊富である。しかも、人口は山梨県の88万に対して群馬県は200万と2倍以上である。しかし、温泉宿泊客数は山梨県の400万に対し、群馬県は600万にとどまる⁶⁾。多くの人々が温泉資源の豊富な県に温泉宿泊客は多いと思いついでいるが、群馬県より温泉資源が少ない山梨県が相対的に健闘しており、温泉宿泊客数の増加率も高い。こうした現象は、個々の温泉地を研究するだけでは説明できない。県域全体での地域観光政策のあり方を考える必要がある。

山梨県には外国人にとって日本のシンボルである富士山があり、ワインの山梨・フルーツの山梨などのイメージが強い。日経新聞の調査によれば、群馬県の地域ブランド力は最下位の47位に対し、山梨県のそれは24位である⁷⁾。こうした県域全体の地域ブランド力の差が温泉資源の豊富な県にもかかわらず群馬県の温泉宿泊客数を相対的に低下させていると考えられる。こうした視点から、本研究では、個別温泉でなく県域全体の総合的な観光資源が温泉宿泊客数にどんな影響を与えるかを考察し、地域観光政策に提言することを目的とする。

研究方法としては、山梨・群馬両県における温泉利用関係のデータ分析とウェブサイトに掲載された観光情報に関するイメージ分析を中心に行う。また、両県における観光に関する計画・施策を分析する。さらに、両県における代表的な温泉地を現地踏査し、分析結果を確認する。代表的な地域としては、山梨県では富士河口湖町、群馬県では草津町を取

り上げた。地域事例としての両町は、いずれも県を代表する観光立町であり、事例地域として適していると判断した。

(4) 研究地域の概観

山梨県は、東京や神奈川などの大都市圏に近接し、富士山をはじめとする山岳景観や豊かな自然環境に恵まれている。また、ブドウ・モモ・スモモに代表されるフルーツ、さらに温泉やワイン・宝飾・絹織物など数多くの観光資源が存在する。

富士河口湖町は、面積158.51km²、人口25,485（2010年6月）を有し、富士山北麓に位置する。湖面に富士を映す美しい河口湖をはじめ、富士五湖の中に本栖湖、精進湖、西湖四つの湖を持ち、河口湖周辺に美術館や体験施設がある。

群馬県には尾瀬国立公園や上信越国立公園など雄大かつ美しい自然景観、「富岡製糸場」などの多くの歴史・文化遺産、「草津・伊香保・四万・水上」などの有名温泉地、「上州牛」や「下仁田ネギ」をはじめとする多くの農畜産物など、観光資源が多い。また、山梨県同様首都圏に位置し、上越・北陸両新幹線や関東・上信越・北関東・東北の高速道路などの高速交通網が整備され、太平洋岸・日本海岸地域を結節する恵まれた交通環境にある。

草津町は面積49.74km²、人口7,256（2010年5月）を有し、日本を代表する温泉街である。江戸時代の温泉番付では東の大関に位置し、世界にも稀な温泉奇観「湯畑」をランドマークに、湯治効能に優れた湯量豊かな温泉地として古くから知られてきた。

2 山梨県富士河口湖町における観光資源連携政策の実態

富士河口湖町は「湖面に富士を映す美しい河口湖」中心に観光立町として発展してきた。特に「五感に訴える町おこし政策」をテーマに様々なイベントの展開や、温泉掘削などハード・ソフト政策による基盤整備を強化した。なお、五感に訴える視る施設としては多

数の美術館を意味し、聴く施設は劇場、嗅ぐ施設はハーブ館など、味わう施設はフルーツランドなど、触れる施設は伝統工芸館などである。

しかし、必ずしも十分な集客力を持つに至らなかった。そこで、富士山・富士五湖に温泉が加われば、観光地として飛躍できるとの視点から温泉掘削を行い、1997（平成9）年4月開催の「いで湯祭」を契機に富士を一番近くに望む温泉郷「富士河口湖温泉郷」を開発した。その結果、イメージがアップし、シーズンオフと言われていた冬季の宿泊者も増加、また、入湯税による税収も確実な財源として確保でき、富士河口湖町は宿泊・滞在型の温泉リゾート、観光地として宿泊・滞在型の温泉リゾート観光地の地位を確立した。さらに、健康科学大学（学生総数961名）の誘致し、「観光・文化・学術都市構想」を推進している。

富士河口湖町には富士五湖を代表するイベントとして、春の「富士桜ミツバツツジまつり」、初夏の「河口湖ハーブフェスティバル」、夏の「湖上祭」、ライトアップが美しい晩秋の「河口湖紅葉まつり」、冬の「河口湖日刊スポーツマラソン」がある。寒冷地のため河口湖の冬季観光は魅力に欠けていたが、温泉掘削の成功により、冬季観光に魅力を付加することができた。また晴天率が高く、冬の澄み切った空気と素晴らしい景観の中で「冬花火・湖上の舞」を始めている。こうしたイベントの成功により富士河口湖町は、四季を通じた個性的な魅力ある温泉リゾート観光地としての地位を定着できた。

以上の結果、富士河口湖町の観光客数は約600万人で横這い傾向にあったが、「いで湯祭」以降増加に転じ、2001年度には約800万人になっている。また、「五感に訴える町おこし」を町衆としてリードした小佐野常夫元町長は、国土交通省の観光カリスマに認定された。

3 群馬県草津町における観光資源連携政策の実態

草津町は古来、湯治場として栄えてきた。高度経済成長期には団体客を中心に多くの観光客を集めたが、バブル経済崩壊後は団体客から個人客へと旅行の趨勢が大きく転換した。そこで、個人客が草津の町並みを一人歩きしやすくするように、「歩きたくなる観光地づくり推進事業」を掲げ、歩行者天国を整備し、案内板や街灯の色彩やデザインの統一を進めている。また、行政も湯治場の情緒を醸し出す古い町並みを再現し、伝統的な建築様式を模した旅館やホテルには工事費を助成してきた。

草津町は地方公共団体の「自立」を掲げ、町制懇談会を開催し、「共生」をキーワードに、「全町民参加で、日本一元気な観光地づくり」を目指している。その実現のために、行政が先頭に立ち、ホテル旅館事業主と共に観光客誘致に各方面に働きかけ、観光客の誘致を図った。また、自立の妨げとなる国の規制に関して、緩和を訴えてきた。

草津温泉に定着した文化事業として、「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル」がある。これは、世界的な音楽家とクラシック音楽を志す人々が、毎年8月中旬から下旬の14日間にわたり草津温泉に集いコンサートと練習を行っている。また、日本温泉地域学会も草津町で「温泉観光士」養成講座を毎年実施している。

草津町は以前から、温泉熱を利用した道路融雪や家庭の温水供給を行うなど、クリーンエネルギー導入を積極的に行っている。さらに、草津町は経済産業省の外郭団体「新エネルギー産業技術総合開発機構（NEDO）」と協力して新エネルギーの実用化と観光振興に努力している。

草津町は日本ロマンチック街道を初めて立ち上げ、協会を設立している。日本ロマンチック街道協会は、上信越国立公園内の3県（長野・群馬・栃木）にまたがる広域観光ルート

を設置し、各種プロモーション、情報の発信を行い、広域連携による誘客を図ってきた。

また、草津町は草津温泉の温泉効能を世界に発信したベルツ博士の生誕地であるビーティッヒハイム・ビッシンゲン市と姉妹都市の縁で、ドイツのロマンチック街道協会とも「姉妹街道の締結」を行っている。さらに、カナダ・メープル街道協会と友好親善協定を結び、両街道の地域の人々、民間団体、所属する自治体間の友好関係に努力しつつある。草津町はビーティッヒハイム・ビッシンゲン市の他にも、カルロビバリシティ市(チェコ共和国)、ノイシュティフト市(オーストリア共和国)、スノーウィリバー市(オーストラリア)の各都市と姉妹都市を結び、ドイツ・ロマンチック街道との姉妹街道といった関係を活用した交流を進める。欧米のみならず中国との観光交流もシンポジウムの開催や青年の招致事業などがある。草津町はこうした訪日外国人旅行者の誘致に力を入れて行くことを基本に、国の進める訪日外国人旅行者倍增政策「ビジット・ジャパン・キャンペーン」と連携・共同して観光地域振興に努めている。

以上の努力の結果、草津温泉は行ってみたい温泉地の上位(2000年度実績延べ宿泊利用人数)にランクされるまでになった。また、一時期落ち込みが激しかった観光客数も持ち直し、現在では年間300万人弱(2008年)で安定的に推移している。草津町は草津の名所「湯畑」を世界遺産にし、温泉地全体をテーマパークとして楽しく魅力ある町にする夢の実現に向け、努力しつつある。なお、国から「自立」し、全町民参加による「共生」の観光地づくりを進める地方公共団体として、中澤敬前町長は国土交通省の「自立と共生のカリスマ」として認定された。

戸所は観光まちづくりとしての再生戦略における観光の活性化に関わる具体的な都市整備について必要な条件として、①交通拠点と公共交通システムの充実、②美しい安心感のある都市景観・歩行環境、③町衆の存在が不

可欠としている⁸⁾。富士河口湖町と草津町の温泉町づくり・地域政策の方法は、まさにこの理論に沿ったものと言えよう。

4 温泉利用状況からみた温泉宿泊客の実態

(1) 温泉利用及び宿泊目的・施設タイプの実態

① 山梨県・群馬県における温泉利用実態
温泉資源が豊富な群馬県は温泉地数が増加しているが、宿泊人員数が減少傾向にある。一方、山梨県は温泉地数が停滞しているが、宿泊客数が増加している(図1)。

② 山梨県・群馬県の宿泊目的及び施設タイプ実態

山梨県と群馬県の宿泊旅行統計をみると、両県来訪者の宿泊目的や宿泊施設のタイプ選択差は僅かである(図2)。

そのため、近年、都市部のビジネスホテルやリゾートホテルに温泉を引湯する例が増加しているものの、それらが温泉統計における宿泊動向に与える影響は少ないと考えられる。

③ 山梨県・群馬県の観光客特性

滞在特徴については、観光客の滞在性からみると、山梨県の日帰り客数は4,122万人で、宿泊客数は631万人であった。日帰りは87%を占めるが、これは観光客の大半が自動車を利用して来訪するからである⁹⁾。

それに対して、群馬県の日帰り客数は5,540万人で、宿泊客数は758万人である。88%が日帰りで、イベント(全国都市緑化ぐんまフェア開催)や新たな観光施設(道の駅くろほね・やまびこ、古民具骨董市、桐生が岡動物園またゴルフ場)の誘致効果と考えられる。観光客の滞在性からみると山梨と群馬両県の差が僅かで、東京観光圏¹⁰⁾からほぼ同距離の両県には、日帰り客数が宿泊客を大幅に超えるのは交通の便利さや自家用車の普及結果の一つと言える。

観光客の居住地からみると、山梨県には「県

③ 桂林周辺省市の国民経済の持続的成長が巨大な温泉観光市場を育む

龍勝は湖南・広西の境に位置し、中原から嶺南沿海に達し、内陸東部から西部に達する要衝である。このような立地の良さにより、多くの消費者を龍勝へ招くことができよう。龍勝温泉景勝地区の旅行者は主に国内旅行者であり、広西省内をはじめ、広東・湖南などの周辺省市からの旅行者が多い。桂林理工大学旅游規劃設計院は、2006年10月国慶節期間に温泉景勝地旅行者の来客源について調査し、国内旅行者600組にアンケートを送り、592組から回答を得た。有効回答数590件のアンケートによると、桂林市からの旅行者は全体の30%、広西省（桂林市を除く）は22%、広東省は17%、湖南省は15%であった。この結果は、龍勝温泉の国内旅行者の来客源が、依然として桂林市・広西省及びその

周辺の省市に集中していることを示している。近年、これらの来客源の経済は持続的に成長している。

2006～2008年にかけて、桂林龍勝温泉の国内の主要な来客源であった桂林市・広西・広東・湖南省の経済成長は右肩上がりであり、この3年来のGNPの伸び率は年平均20%である（表2）。1人当たりの域内生産額の平均伸び率は平均で19%、都市労働者の給与の伸び率は年平均16%である。この成長傾向は、人々がさらに多くの旅行消費を求めるであろうことを暗示しており、龍勝温泉観光業の発展に有利な外部経済環境を提供し、潜在的な消費者数を増大させるであろう。また、近年の法定休暇の増加と旅客主要供給源の省におけるマイカー普及率の上昇は、龍勝温泉観光発展に新たなチャンスをもたらすことになる。

表2 龍勝温泉における国内主要来客源の国民経済発展状況（2006～2008年）

項目 地区	国民総生産 (単位:億元)			1人当たり域内生産額 (単位:元)			都市労働者年間所得 (単位:元)		
	2006	2007	2008	2006	2007	2008	2006	2007	2008
桂林市	619	746	883	12,452	14,878	17,435	17,865	14,878	17,435
広西省	4,801	5,885	7,171	10,240	12,408	14,966	18,064	21,898	25,660
広東省	25,968	30,673	35,696	28,077	32,713	37,588	26,350	29,443	32,976
湖南省	7,493	9,145	1,156	11,830	14,405	17,521	17,856	21,534	24,767

(注) 各省・市の2006～2008年統計年鑑。

(4) 脅威・挑戦 (THREAT)

① 周辺温泉観光地との競争

1990年代の初めから温泉観光商品の開発は、次第に投資者の注目を集めるようになった。全国各地で相次いで温泉観光商品の開発が始まった。龍勝周辺の温泉資源が豊富な省と市も、また前後して温泉観光開発を進めた。広西省だけでもすでに開発された温泉観光地が、象州温泉・容県黎村温泉・南丹温泉・賀州路花温泉・博白温羅温泉・寧明獅山温泉・南寧那馬温泉・平楽仙家温泉の10カ所への

ぼる。周辺部に温泉観光地が数多く開発されたことは、龍勝温泉観光業にとって大きな脅威である。その中でも、平楽仙家温泉と賀州路花温泉は、広西東北部と東南部に位置し、それぞれ龍勝温泉から200kmと350kmしか離れておらず、省内で龍勝温泉に最も近い温泉観光地である。近年、前述の地区の温泉観光業は好調であり、龍勝温泉観光業は周辺地区との激しい競争にさらされている。

龍勝周辺の湖南・広東省の温泉観光業も近年において発展が著しい。広東は、中国で最

ポートを提供するものである。

その他、政府は地価や融資の方面で、少なからず補助政策を打ち出した。この数年来、政府は観光業に投入する経費を増やしている。2002年以降、相次いで総額1億元余りを投入して、温泉景勝地区を全面的に改造し、基礎的な温泉施設の建設を加速、四つ星の温泉中核ホテルを建設し、温泉浴場を改造した結果、現在龍勝温泉景勝地区はすでに国家級AAA景区に指定され、17軒の各種ホテルが経営している（写真1、2）。20年来の努力を経て、龍勝県の観光資産は4億元余りに達し、5つの旅行会社と1軒の四つ星ホテル、42軒の主要なホテルを有するにいたった。龍勝県はすでに広西の優秀な観光地で、かつ全国レベルの自然観光地となっており、観光業は、龍勝県の支柱産業の1つである。広西当局もまた温泉観光開発を重視しており、広



写真1 龍勝温泉リゾートホテル
（注）陳 焯撮影 2010年。



写真2 龍勝温泉リゾートの露天風呂
（注）陳 焯撮影 2010年。

西区旅游局はまた温泉観光開発を今後5年間の重点項目としている。この他に温泉観光開発をモデル化するために、広西質量技術監督局は2009年5月に「広西地熱温泉分類」、「広西地熱温泉衛生安全要求」、「広西温泉旅游度假区服務質量規範」の3つの指針を発表した。これらの文書は、広西温泉観光開発をモデル化し、温泉観光サービスの質を向上する一助となるであろう。

② 国内外温泉観光ブームの持続と加熱

温泉観光は、保養・リラクゼーション・レジャーを一体とした観光形式であり、世界各国で愛好されている。ヨーロッパや日本・韓国などでは温泉観光が好まれており、広い市場を持ち、産業自体も成熟している。日本の例をみると、1999年時点で、源泉数は2万1,758カ所もある。その多くは観光時に利用されている。さらに、温泉キャンペーンや各種文化活動により、日本独自の温泉文化が形成されている。2005年の日本交通公社の調査によると、旅行者が観光地として温泉を選ぶ比率は52%で第1位である。温泉観光は、国際的にも十分大きな潜在的市場を有していることが分かる。龍勝温泉景勝地区最大の温泉ホテルの調べでは、2002年の外国人旅行者は2,195人、2006年には1万3,828人に達し6.3倍に増えた。外国人旅行者の温泉観光市場は、大きな潜在能力を秘めている。

いまや、中国は「休暇時代」に入った。このことは、旅行レジャー産業の未来が明るいことを示している。温泉観光需要は日々増えており、国内の温泉旅行資源を有する省と市は、競って温泉観光を地区の観光産業の目玉にしようとしており、温泉経済の発展が著しい。こうした国内の温泉観光熱のもと、龍勝温泉景勝地区には無限のビジネスチャンスがある。2006年の龍勝温泉ホテルの国内旅行者数は、4万2,836人に達し、2003年の2万8,719人と比較して大きく伸びている。龍勝温泉観光業の発展は、間違いなく国内外観光業発展の趨勢に乗じたものである。

当年の温泉景勝地区の来客数は約15万人で、そのうち5月1日のメーデーと10月1日の国慶節の長期休暇期間の来客数が2万4,000人で、年間総人数の16%を占めた。一方で、市場の細分化が商品の競争力を決定することもまた周知の事実である。龍勝温泉の観光開発は、大衆市場を主な対象としていて、多様な旅客心理を把握できていない。そのため、開発した商品が異なった年代や職業の旅客にとっては必ずしも魅力的でない。

② 温泉観光商品の単一性と文化的背景の欠如

現代の温泉観光は、すでに過去の単一な療養目的から保養・休養・観光・娯楽といった多くの目的をもつものとなり、温泉に依拠しつつも食・住・旅行・レジャー・買い物・娯楽などを含む総合的な商品へと進化している。しかし、龍勝温泉の観光目的の種類は比較的少なく、多くが療養・入浴などに限られており、リラクゼーション・健康・観光・科学普及などの総合的な商品を開発していない。観光客は、目的地を選択するとき、距離・時間・交通手段・費用などの一般的な要素を除いて、現在では目的地のイメージを重視するようになってきている。人々は旅行に対して感動と精神的な影響に拠り所を求めており、ブランド文化が非常に重要となってきた。龍勝温泉は、当地の地方文化を十分に活用できておらず、未だに温泉資源と地域文化資源を十分に融合した特色のあるテーマを打ち出せていない。開発方法に遅れをとれば、国内外の市場に対する競争力がなくなることは言うまでもない。龍勝温泉観光の発展のために、品位と競争力のある温泉観光商品を開発することは、焦眉のことである。

③ 温泉観光管理とサービスの専門人材の欠如

温泉観光業には、観光・温泉・健康・リラクゼーション・娯楽に関する知識を持つ専門的な人材が必要である。温泉観光地の競争は、結局のところ人材の競争であり、顧客に

応じたサービスから商品の設計開発及び管理などに至るまで、すぐれた人材が求められている。温泉観光経営管理人員の資質の優劣、サービス人員の専門的技術、サービス意識の良し悪しは、温泉地のソフト面で重要な指標である。龍勝温泉の主要なサービスは、ホテル+温泉というスタイルであり、温泉管理は、ホテル管理の基礎知識の上に行われている。温泉経営管理とホテル管理は大いに類似性があるが、実践には温泉に関する多く専門知識が必要であり、専門的に管理する人材を招聘する必要がある。広西およびその周辺の地区で観光専門科がある大学のうち、温泉観光専門科を有する学校は一つもない。観光管理とサービス業では、専門科出身の人材が不足している。それだけでなく、温泉景勝地区のサービス人員の大部分は当地の住民であり、彼らの文化程度・知識・専門技術などの総合的な資質は相対的に低いのが実情である。

(3) 機会 (Opportunity)

① 政府の重視と援助

龍勝県は、広西桂林市に属す経済発展が遅れた山間部の県であり、経済的に貧しいが、観光資源は豊富である。数年来、政府は一貫して観光を経済発展の基軸とし、当地の観光資源の開発と利用を重視してきた。自治政府は1992年から観光により貧困を脱する戦略を実施し、全県の農工業生産をすべて観光開発のために注ぎ込んできた。当地の観光業の発展を促進するため、1996年に「観光立県」の発展戦略を提示した。県政府は旅游工作委員会を設立し、観光開発上重大な問題を研究し、解決している。2007年に県政府は「龍勝観光業発展を加速するための提言」を打ち出し、観光業を国民経済の支柱産業として育成し、温泉景勝地区と龍脊棚田景勝地区の建設に力を入れ、良質なブランド効果を生産し、他の観光商品と連動して開発することにした。前述の政策と文書の策定は、龍勝観光業のさらなる発展のために、強力な政策的サ

状況

龍勝温泉景勝地区は、桂林の観光景勝地である龍勝県内に位置し、現在、省級旅游度假区に指定されており、県城から30kmの距離にある。龍勝県は広西省東北部に位置し、広西の観光景勝地の一つで、県境は湖南・貴州・広西3省8県に隣接し、桂林市から87kmほど離れている。国道2級公路321号が貫通しており、湘桂鉄道や航空線に連絡でき、陸路では、湖南・貴州・広州・柳州などへ連絡している。西へ向かえば、三江県まで60kmで枝柳鉄道に連絡でき、南北方向へは、国道209号を利用できる。こうした有利な立地条件は、大桂林旅游経済圏建設の過程で、湖南・広東・広西・貴州四大観光圏の来客源と観光資源を結びつけるために、計り知れない効果を発揮すると同時に、温泉観光の発展に好条件を提

供している。近年、龍勝温泉観光業は龍脊棚田観光と温泉観光の連係のもとに急速に発展しており、国内外からの旅行客数と観光収入は毎年上昇している。

表1のように、2003年以降、龍勝を訪れる観光客数と観光総収入は共に上昇しており、2008年の観光客数は2003年の約1.9倍、2008年の観光総収入は2003年の約7.5倍であり、当地観光発展の好調さがかがえる。現在、龍勝の観光総収入は桂林の12県中第3位である。別の資料によれば、2008年9月24日に龍勝県城から温泉へ通じる2級環保公路開通後、国慶節期間だけで龍勝を訪れた国内外の観光客は10万人を超え、調査開始以来最高であった。

表1 桂林龍勝県の観光客数と観光収入（2003～2008年）

項目 \ 年度	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
総観光客数(万人)	47	53	58	66	78	87
海外来客数	2	3	7	12	16	17
国内来客数	45	50	51	54	62	70
観光総収入(万元)	5,526	6,744	7,151	27,400	36,928	41,200

(注) 龍勝県旅游公司・龍勝県旅游局の2003～2008年旅游發展報告。

(2) 短所 (Weakness)

① 温泉観光ブランドの未確立、市場の細分化の不徹底

桂林龍勝温泉は、温泉資源は国内屈指であるが、当地の龍脊棚田についての国内外の知名度と比べると、その名声はかなり低い。桂林理工大学旅游規劃設計院が2006年に龍勝の観光客に対して行った「龍勝景勝地イメージ認知調査」資料によると、龍勝の観光資源中で龍脊棚田のイメージが最も突出しており、67%の観光客が龍勝といえば、まず棚田の景色を思い起こしている。続いて温泉が43%、少数民族風情が43%である。中国では、珠海御温泉・広東從化温泉・江蘇湯山温泉・

陝西華清池温泉などが国内外に知られる温泉観光地のブランドである。一方、龍勝温泉は規模・等級・サービス・マーケティングのいずれの方面でも全国的あるいは国際的競争力のある商品ブランドや企業ブランドにはなっていない。現在、龍勝温泉の観光マーケティングは、宣伝力が低く、ネットでの営業も活発でないなどの問題があり、これらが桂林龍勝温泉観光業の発展を妨げている。一方、龍勝温泉観光はオン・オフシーズンの区別がはっきりしている。具体的にいえば、9～11月と3～5月は温泉を楽しむのに最高の季節であるため、観光客が集中し、その他の季節は消費が落ち込む。2006年の例では、

2 林龍勝温泉観光開発のSWOT分析

SWOT分析は、観光開発分析において広く使用される比較的成熟した戦略分析方法である。Sは産業内部の長所（Strength）、Wは産業内部の短所（Weakness）、Oは産業外部の機会（Opportunity）、Tは産業外部環境の脅威（Threat）を指す。これは産業内部の条件と外部環境の諸要素を考慮して系統的に評価し、最善の経営戦略を選択する方法である。現在、桂林龍勝温泉観光業の開発は初期段階であるので、ここでSWOT分析方法を活用して龍勝の温泉観光資源と商品の長所および短所を客観的に分析し、龍勝温泉観光業の発展戦略策定のための参考に資することにした。

(1) 長所（Strength）

① 温泉観光資源の豊富さ・独自性・泉質の良さ

龍勝温泉資源は、豊富な温泉だけではなく、医療・保健的な価値も極めて高く、「華南第一泉」と呼ばれている。龍勝旧県志によれば、当該温泉は「皮膚疾患を治し、水質は白く、臭気がなく、森林の奥にあるにもかかわらず、遠近からの旅客が絶えることがない。」という。その水源は5kmの森林に覆われたカンブリア紀の地層にあり、白崖嶺から天鵝界にかけて数10km伸びる断層が温泉水脈となっている。泉水は地下1,200mの岩層から湧き出しており、泉質は透明で、泉源は大小16ヵ所、水温は平均54～58℃、流量は毎時180t、医療鉱泉水分類では高熱鉱泉に属する。泉水は無色無味で濁度・色度は共に5度以下で透明である。水素イオン指数はpH7.0～7.6で中性水に属する。総硬度は3.7～4.4度で極軟水に属する。

通常、温泉水は多くの硫黄分を含んでいて、飲用できないが、龍勝温泉水は、メタケイ酸の含量が比較的多く、10当たり39～55gで、他にもリチウム・ストロンチウム・鉄・亜鉛・銅など10数種の人体にとって有益な元素を微量に含んでいる。国家地質・軽工業・衛生

部門の専門家の鑑定によれば、龍勝温泉水は優良な天然飲用鉱泉水かつ医療鉱泉水であると指摘されている。特に泉水のラドン平均含量は、医療鉱泉水の基準を大きく上回っている。ラドンを含む鉱泉は継続的に入浴することで循環器疾患・関節炎・糖尿病・皮膚疾患及び婦人病などに対する理療・治療効果が期待でき、健康に良い。当地の瑶族はこの泉水を「神水」と呼んでいる。龍勝温泉は、地下深くで循環しており、そのために比較的高い水温と一定の水量を保持することができ、水量豊富なことから年間の入浴需要量を十分にまかなうことができる。桂林理工大学旅游規劃設計院の実地調査によれば、その品質は国内で著名な広東從化温泉と比肩される。

② 温泉地周辺の自然環境保護は良好で、観光資源が豊富

龍勝温泉景勝地区は、珠江流域水源林保護区内にあり、自治政府と住民は水源保護に比較的热心である。龍勝県の自然観光産業計画では、すでに温泉景勝地区周辺を観光の目玉としており、地区内の環境保護を求めている。景勝地区には木々が茂り、動物が戯れる豊かな自然が残り、一步景勝地区に入れば自然に帰ったような感覚を覚え、心身の自由とリラクセーションが得られる。龍勝温泉資源は、その他の観光資源と密接に結び付いており、周辺の観光資源は豊富で種類も多様である。これらは、おおむね自然景観・森林景観と瑶・侗・苗・壮の少数民族などにおける人文景観の3種類に分類される。比較的有名なものは、「八桂第一漂」と称えられる岩門峡漂流、紅瑶民俗風情が特徴的な紅瑶民俗村落、龍勝各少数民族の民俗文化と飲食文化が特徴的な大塘湾民族山村、世界に名高い龍脊梯田地区及び森林公園・紅軍岩などの観光名所である。これらの観光資源と温泉観光が共に脚光を浴びることが、当地の温泉観光資源開発を深化するうえで相互補完的な役割を果たすことになる。

③ 立地の長所と当地観光業の順調な発展

桂林龍勝温泉観光開発の SWOT 分析と方策

SWOT Analysis and Steps of Tourism Development in Long Sheng Spa near Guilin, China

鈴木 晶* 陳 偉**
Akira SUZUKI Wei CHEN

キーワード：桂林 (Guilin)・龍勝温泉 (Long Sheng Spa)・SWOT・
温泉観光 (spa tourism)・開発プラン (development plan)

1 はじめに

21世紀に入り、中国の経済発展が進むにつれて、人々の生活水準は上昇し、観光サービスも、観光のみを目的とするものから健康・リラクゼーションやレジャーを目的とするものへと変化した。温泉観光は、まさに温泉保養とレジャーを複合した観光形態であり人気が高い。温泉は、希少な地熱資源であり、医療・工業などの分野にも活用されるのみならず、観光業にとって重要な資源である。温泉観光は、次第に多くの観光客と投資家を引き付ける観光の新業態となりつつある。

近年、中国では人々がより高い生活の質を追求するようになっており、温泉観光熱はますます高まり、国民経済における新たな成長産業となっている。桂林市龍勝県は、温泉資源の豊富な地区で、現在その観光開発は成果を上げつつあり、桂林龍勝地区観光業の発展戦略において重要な位置を占めている(図1)。

本論では、SWOT分析方法を使い、桂林龍勝温泉観光開発の長所・短所・機会・脅威を分析し、桂林龍勝温泉観光開発に関する方策を提示する。



図1 龍勝県の観光ポイントと龍勝温泉 (2010年)
(注) 桂林江山国際旅行社の専用サイトによる。

* 別府大学短期大学部 (Beppu University) ** 桂林理工大学 (Guilin University of Technology)

実践士などの養成講座を国内に限らず、海外でも積極的に開催し、日本の温泉開発の失敗例、温泉まちづくりの成功例など実例をあげながら、その実態や教訓を伝えることも重要である。

注・参考文献

- 1) 浦達雄 (2006) 『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』クリエイツ、218頁。
- 2) 山村順次 (1990) 『観光地域論 地域形成と環境保全』古今書院、334頁。
- 3) 戸所隆 (2000) 『地域政策学入門』古今書院、204頁。
- 4) 戸所隆 (2004) 「中心街の再構築による温泉観光地の活性化構想—伊香保温泉街を例に」産業研究、40(1)、16～38頁。
戸所隆 (2005) 「ホテル旅館経営者の意識からみた伊香保温泉街再構築のあり方」産業研究、41(1)、1～26頁。
戸所隆 (2006) 「伊香保温泉街におけるパーク・アンド・ライド・システムの構築方策」産業研究、42(1)、24～42頁。
- 5) 王薇 (2010) 「中国温泉地との連携による中国人観光客の誘致政策—伊香保温泉観光地の事例を通して」日本地域政策研究、(8)、325～332頁。
- 6) 環境庁・温泉利用状況統計データ 2008年
- 7) 前掲6)
- 8) 山梨県当局における聞き取り調査による。
- 9) 戸所隆 (2010) 『日常空間を活かした観光まちづくり』古今書院、174頁。
- 10) 山村順次 (1967) 「東京観光圏における温泉観光地の地域的展開—温泉観光地の研究」地理学評論、40 (11)、41～59頁。
- 11) 総合観光学会 (2010) 『観光まちづくりと地域資源活用』同文館、129頁。
- 12) <http://www.mapfan.com/>
- 13) 前掲11)
- 14) 前掲9)
- 15) 前掲1)
- 16) 全国町村会・論説 <http://www.zck.or.jp/article>
坂本誠 (財) とっとり政策総合研究センター 研究員「文化創造型地域づくりを」。

参考資料：

全国町村会広報部 2685号 (2009年7月6日)

<http://www.zck.or.jp/forum/2685/2685.htm>

「町村の先進的な取り組み事例を現場からレポートします・住みよい町は訪れたい町 地域の住民が主人公のまちを目指して 山梨県富士河口湖町」。

全国知事会 先進政策バンク

<http://www.seisaku.nga.gr.jp/search.php?bun=08>

A はばたけ群馬・県土整備プラン/新しい時代の扉を開く社会資本整備に取り組みたい。

B 地場産業「ジュエリー」の活性化 (山梨県)。

C 「やまなしブランド」の情報発信。

調査5 山梨県の観光資源発掘調査 お客様が感じる山梨と甲府のイメージ (平成14年度活路開拓ビジョン調査事業から)。

<http://www.nns.ne.jp/pri/csk/tyousa-5.html>

山梨県観光客動態調査結果 (平成20年)

群馬県平成20年度観光客数・消費額調査 (推計) 結果。

アンケートをした結果、「たぬき」と思った数が多いのである。

温泉資源が豊富な日本を訪れる外国人観光客に対しては、群馬県の温泉より日本近代産業の発祥地や先端医療技術と健康医療システム¹⁴⁾のイメージに親しみを持たせることが大切であると考え。これからは、温泉観光を主役とした意識から、新しい観光ニーズの助役としての転換が必要だと考える。たとえば、温泉旅館で泊まることが目的ではなく、温泉旅館である種の茶道の体験学習コースを開くなどである。

また、群馬県の圏域位置の伝え方が統一されていない。たとえば、1994年から1996年まで、観光消費額推計表の項目は70ヵ所の観光地、11地区に分けて作っていたが、1997年から、市町村別に変わっている。1996年以前の項目を見れば、観光地の位置については群馬県における大体の位置が分かるし、観光資源としても一目瞭然であった。市町村別に観光消費額を列挙することは、観光客に対しては行政の仕組みしか見えない。観光資源の魅力や人気の観光地などの情報が、得にくくなっているのである。

まず、観光イメージとして、鶴のように「羽ばたけ群馬」をあげることが一つの提案として考えられている(図5)。地図に沿って群馬県内の圏域の位置が明確に伝わり、各圏域の観光資源の個性を表せるのである。

7 まとめ

以上、山梨県と群馬県の比較研究を通して、地域観光政策の実態について述べてきたが、ここでは、その課題について整理し、まとめとしたい。

浦は、まちづくりのキーワードはハードからソフト、ソフトからハードへ変わりつつあるという。ハードとは「おもてなしの心」であり、資本投下型の開発やまちづくりではなく、ハードやアイデアを投入する精神注入型のまちづくりが、長引く平成不況の貴重な薬



図5 群馬県「鶴のイメージ」

効となると、提案した¹⁵⁾。筆者は、町村レベルのまちづくりだけではなく、観光立県にも、精神注入型のまちづくり、特に、観光政策の課題として、意識の転換が重要だと考える。21世紀は、国際交流の中で観光を振興する時代である。国内的視点から国際的または他国の視点から意識の修正が必要である。

本研究は、地域政策の視点から温泉観光地の活性化を探っていたが、各温泉観光地自体の活性化には限界がある。さらに発展するためには、県域という広域の観光政策のレベルアップを実践すべきである。幸い日本政府は観光立国を宣言し、国レベルの観光政策を推進している。

レベルアップを行うには、従来型のハコモノ重視の政策ではなく、精神や文化創造が重要である。坂本誠¹⁶⁾は、文化の創造について、文化の維持保全という「守る」ことだけを考えがちだが、地域の資源を生かしながら、新たな文化を創造すべきであると述べている。

21世紀の日本は、国際交流から国際協力へと転換すべき時代である。国際協力の中の一例として、日本の温泉文化を正しく世界に発信すべきであろう。日本は世界を代表する温泉利用先進国であり、これまで蓄積したノウハウを世界へ伝授することが国際協力にもなろう。具体的には、温泉観光士や温泉観光

全国先進政策バンクに選ばれた。

C 「やまなしブランド」の情報発信 (2010年)

漫画「美味しいんぼ」を職員名刺の裏面に印刷し、甲州ワインなどをPRし、結果として、山梨県を潜在的に意識し、山梨県のイメージアップにつながり、県職員プロジェクトチームによる「山梨ブランド」PRの推進を図る。

D 温泉旅館協同組合が地域の外客誘致活動を主導し、中国人観光客の受入体制整備する。

YOKOSO! JAPAN大使に選ばれた池田政伽津氏をはじめ、「石和温泉旅館協同組合」が海外誘客部会を立ち上げ、中国で観光を学ぶ専門学校の研修受け入れを開始した。日本語・日本文化の講習やホテル・旅館における接客等の実務研修を行い、日中相互の文化・慣習の理解促進に先進的に取り組むと共に、中国人観光客の誘客促進・受入体制整備に努めている。

② 群馬県の仕組みー「てんぱくテン子の旅」

上州力まるごと活用協議会は「てんぱくテン子の旅」計画を立て、かつて競争相手としている各温泉地の旅館同士が連携し、温泉好きな女性に向けて、群馬県内の四大温泉を転泊させるように、草津Hホテル(草津)、ホテルM楼(伊香保)、T館(みなかみ町)、K旅館(四万)4つの旅館同士が立ち上がり、県外のお客様を誘致する。

6 県域イメージについての提案

(1) 山梨県の県域イメージについて

718年、勝沼に来て修行していた修行僧がブドウを手を持った薬師如来を夢で見たことで、ブドウの栽培がはじまったといわれる山梨のフルーツの栽培は歴史が長い。この自然条件と社会環境で生まれたフルーツの山梨、ワインの山梨という県域のイメージは、高度成長期の温泉地での歓楽社員旅行のブームが終わった後、主婦たちの買い物ツアーと相まって向上しているのではないかと考えられ

る。今後の観光・交流時代において、環境への関心が高まって世界の各国の人々が、自然に大事する地域への興味が増すであろう。それに応じて、山梨県は「ワインの山梨」「フルーツの山梨」のイメージから「水の山梨」という未来の山梨のイメージも作り出した。この意識の転換が、将来展望をふまえた戦略だと考えられる。

(2) 群馬県の県域イメージについて

群馬県の「空っ風」や「肝っ玉母さん」という自然イメージは、歓楽社員旅行や買い物ツアーには向いていない。

全国の約90%を占める日本一のこんにやくの産地でもある群馬県において、こんにやくいも・こんにやく製品のブランド戦略が見えていない。小麦粉や蕎麦のブランド品を持ち、うどん・そば屋の店舗数も全国一とはいえ、うどんやそばより、イタリアの Pasta を自慢している群馬人が多いといえよう。

筆者は、群馬県内外の日本人に対して、「群馬について一言で表す」という任意の聞き取り調査を3年間続けている。その結果、多くの人々は思わず口に出すことができないのである。考えぬいた後、「群馬は温泉」と答える人が多く、温泉といえば草津だということになる。つまり、小面積で人口も少ない草津の温泉町のイメージが、群馬県全体より遥かに高いのである。続いて、多くの答えは世界遺産に登録するため頑張っている「富岡製糸場」である。群馬県の観光イメージについては、山梨県のように「ワインの王国」、「フルーツの王国」のようなトータルイメージを確立しておらず、アピールが足りないと考えられる。

群馬県の観光計画「はばたけ群馬」では、鶴のように飛び立つイメージを作り出そうと考えている。しかし、現在の群馬県のマスコットは「ぐんまちゃん」である。スポーツ大会など、全国のマスコミによく報道されているが、群馬の「馬」と連想された「ぐんまちゃん」を見るたびに、高崎経済大学の留学生に任意

表1 山梨県・群馬県の観光課題

山 梨 県	群 馬 県
宿泊客の増加 リピーターの確保 国際観光の振興 宣伝戦略の強化	観光客の増加 宿泊客の増加 外国人旅行者の増加 県産品の提供や開発 本県の観光イメージ を向上

表2 山梨県・群馬県の観光目標

	山 梨 県	群 馬 県
観光客数	5,000万人	7,000万人
宿泊客数	700万人	900万人
外国人 旅行者数	100万人	11万人
発信施策	富士の国山梨観光ネットへのアクセス 数800万ページビュー 携帯電話専用観光ホームページへの アクセス数16万ページビュー 富士の国山梨フィルム・コミッション のロケ実施件数 180件	

トップセールスを通し、富士山を始め山梨の魅力在海外に発信すると考えているが、群馬県はウェブ上に外国版を活用すると考えている。筆者の経験では、中国本土で群馬県の中国語版観光情報をアクセスしようとする一般民衆が少なく、それは、群馬が面白いものがないということではなく、群馬のオリジナルものがまだ認識されていない、知らされていないと考えられる。

2010年県の観光イメージを向上するため、群馬県は観光キャッチフレーズ・ロゴ「ぐんまちゃん」を作った(写真1)。



写真1 「ためき」と連想された「ぐんまちゃん」

これは、1994年10月15日～16日に開催された、第3回全国知的障害者スポーツ大会「ゆうあいピック群馬大会」のマスコット「ゆうまちゃん」として生まれた。その後、1996年11月に開催された第9回全国スポーツ・レクリエーション祭「スポレク群馬'96」のマスコットとしても活躍、2004年10月16日～19日に群馬県で開催され、高齢者を主役としたスポーツ・文化・福祉の全国的イベント、第17回全国健康福祉祭群馬大会「ねんりんピックぐんま」でも、マスコットとして活躍した。そして2008年7月、東京に「ぐんま総合情報センター(愛称:ぐんまちゃん家(ち))」がオープンしたことを契機に、県外の人にも群馬県のマスコットとしてわかりやすいよう、呼称を「ぐんまちゃん」と改めた。現在は、群馬県のマスコットとして、県のイメージアップに期待されている。

(2) 山梨県・群馬県における地域ブランド
カアップする仕組み:

① 山梨県の仕組み

A 山梨ブランド戦略(2007～2008年)

山梨県はイメージを絞るため、ブランド戦略懇話会が5回を行い、やまなしブランドについては以下の意識を統一された。④特産・名産・商品に限定されない、⑤県民の誇りとして認識される、⑥後世、県外や国外にも伝えていくべきものなど3つ条件をあげ、山梨についての一般イメージにはワイン王国・果樹王国・富士の国・観光立県・森の国・水の国などから、「水」というイメージを絞っていた。

B 地場産業「ジュエリー」の活性化(2010年)

山梨県に特有の地域資源である「ジュエリー」を活用した観光資源「ジュエリー・ツーリズム」の創出し、「甲府ジュエリーフェア」に併せ、旅行業者を対象にエクスカッションを実施することにより、ジュエリーのクオリティの高さと業界の層の厚さを旅行業者にPRし、具体的なツアーの造成を促す施策が

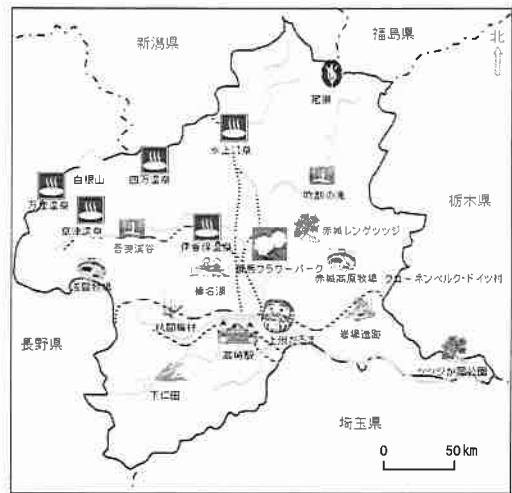


図4 山梨県(左)・群馬県(右)の観光イメージ
(注) mapfanwebにより作成。

載せている3つ観光地名もそれぞれである。温泉であれば、都市でもあり、山でもある。また、同じページに載せた温泉地を紹介する図には、圏域の区分がさらに細分化し、温泉地の名前を覚えても、場所が分からない。

高橋光幸は「魅力ある観光地創出の発想と方法」の一文に、魅力ある観光地創出の方法について、魅力ある観光地像の明確化が必要だと述べている。地域の風土や歴史などの中で人々の営みによって形成され、蓄積されてきた個性を生かし、観光客が心を惹かれる魅力ある観光地を作るためには、地域の人々の意識と暮らし方を変えることが大切である。しかし、地域の人々の意識を変えることは難しい。また、意識を変えるだけでは現実に対応できない・人々の意識を変え、暮らし方を変えるためには、人々に新しい暮らし方の意義と方向性を示す地域ビジョンの策定とそれに対する人々の合意形成が必要である。地域ビジョンでは、新しい暮らし方の必要性和意義、少しの成長でも豊かな暮らしを実感できる地域づくりの方向性や具体的なあり方、人々の新しい暮らし方を支援する地域の仕組みづくりのイメージなどについて、わかりやすく、具体的に示すことが大切である」と指摘した¹³⁾。

5 地域資源を活かした地域イメージアップ政策とその運用形態

(1) 2008年から2012年までの両県観光計画

山梨県と群馬県は各自の観光計画の中に、それぞれが県のイメージを向上する目標も含めているが、意識と具体的な施策方法からみると、山梨県が一步先に進んでいるようである。本稿は、課題選択・目標設定・施策内容など3つの方面から取り扱い、山梨と群馬県行政意識の差を比べたい。

① 課題の選択

山梨県と群馬県の2008年～2012年の観光計画には、今後の観光立県の課題は共に観光客の増加を挙げたが、山梨県は宿泊客層をターゲットとし、群馬県は県の観光イメージを向上すると明言した(表1)。イメージについては、山梨県は「ワインのやまなし、フルーツのやまなし」の県観光イメージがすでに確立していた。

② 目標の設定

イメージを向上するための施策目標については、観光客の人数だけではなく、発信目標を明確するのも大切であるが、残念ながら、群馬県にはまた確立していない(表2)。

③ 施策

外国人観光客を増加するため、山梨県は

内」の観光客の割合が30%、「県外（外国を含む）」が70%である。それに対して、群馬県には県外客の割合が43%にすぎないで、群馬の知名度が低いとも関連あると考えられる。

観光客の目的からみると、群馬の温泉が豊富さは23%の観光客を吸引した以外に、自然と文化・歴史を楽しむ観光客の割合は山梨県より7ポイント低い。山梨には文化・歴史の観光客が21%を占めるのは近年「風林火山」ドラマの影響が強いと県関係者が考えられる。群馬県の行・祭事やイベントを見るための観光客の割合が山梨の10倍近くのは群馬のコミュニティ文化のオリジナル性を表す。また、山梨は産業観光、買物の割合が群馬より多い（図3）。

山梨県の県外観光客、自然や文化・歴史、産業観光目的など項目が優勢を持っているのは県域としてイメージをよく知られると考える。また、単一なる温泉を強調するより、「風林火山」ドラマのような「地域の文化イメージを高め、まちづくりに大きく貢献する」¹¹⁾ 芸術・文化を生かすのは必要である。

(2) 山梨県・群馬県における観光情報イメージ

① インターネット上の観光情報イメージ
インターネット企業が作った各都道府県の観光地図がある。その殻、アクセスすれば具体的な場所まで探すことができる。多くの利用者がまず全体を見てトータルイメージを得られるだろう。例えば、mapfan ウェブ¹²⁾に載っている山梨と群馬両県の観光楽地図を比べると、山梨と群馬の観光イメージの差が一目瞭然である（図4）

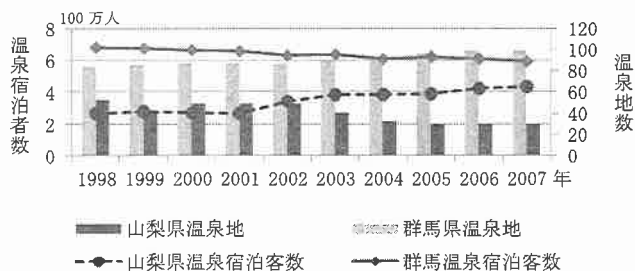


図1 山梨県・群馬県の温泉利用の実態 (1998～2007年)
(注) 環境省の温泉に関するデータ「温泉の保護と利用」により作成。

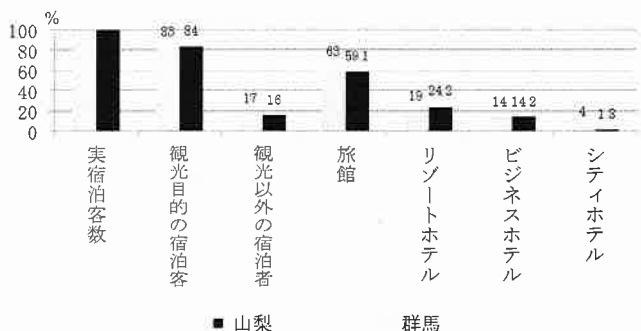


図2 山梨県・群馬県の観光客の宿泊目的・施設タイプの割合 (2008年)
(注) 国土交通省観光庁の宿泊旅行統計調査報告による。

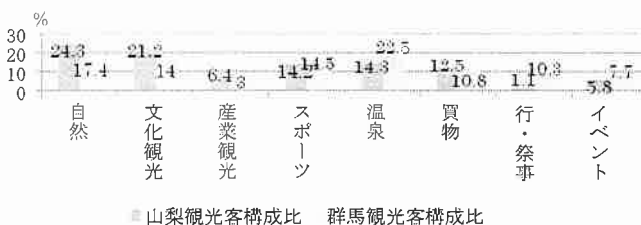


図3 山梨県・群馬県の観光客の目的構成 (2008年)
(注) 山梨と群馬両県の2008年度観光観光客動態調査による。

群馬の主要温泉地周辺には他の観光施設が載っていないで、温泉しかないイメージが強く残っている。それに対して、山梨県のわずかな温泉地周辺にはフルーツ公園やワイン工場などが隣接している。

② 山梨県・群馬県が自ら発信するイメージ
山梨県の圏域位置図をみると、昇仙峡を基準として南北東西の位置を判明し、県域における相対位置も分かっている。群馬の観光地をみると、各観光地が所在する圏域における県域に当たる位置が分かりづらい。各圏域に

も温泉資源が豊富な地区であり、過去 10 年間で、自己の豊富な地熱資源に依拠し、温泉観光を観光の支柱産業かつ先駆産業とみなし、全国に先駆けて温泉観光開発を行い一早く発展させた。その温泉観光商品の開発モデルと営業上の豊富な経験により、旅行市場においても人気が高い。現在、広東省が掘削した温泉は 130 ヶ所あまりあり、このうちすでに開業した温泉は 70 ヶ所あまりで、毎年の温泉産業の営業収入は 100 億元に迫る勢いである。温泉観光は広東省観光業の成長産業である。珠海御温泉と「中国温泉の郷」と呼ばれる恩平温泉などは国内温泉開発の典型的な成功例である。発展の遅れている龍勝温泉観光業が後れをとり返すのは容易ではない。この点からいえば、龍勝観光業は競争相手を自らの主要な来客源としなければならず、難しい挑戦だと言える。

② 消費者の要求水準の上昇とその他の観光商品開発が龍勝温泉観光業に与える影響

人々の生活水準が上がるにつれて、比較的高い選択能力と消費意識を持った旅行者の温泉観光地に対する要求も高くなってきている。一方で、彼らは普通の旅行環境に満足するだけでなく、観光施設・サービス態度・オリジナリティ・価格などさらに高い要求を持つようになり、もし満足できなければ彼らは別の観光商品を選ぶことになる。これは、今なお開発途上にある龍勝温泉観光業にとって脅威である。一方、国内消費能力の上昇に伴う遠隔地への旅行者増は、国内温泉観光の新たな潮流となっている。

近年、中国の国民が望む旅行スタイルは、新たな段階へと移行している。そこで、新たな商品として、例えば、農村観光・少数民族集落観光・スポーツ探検などが開発されている。こうした観光商品と温泉観光商品は、客層が比較的近く、それらの存在が各地の観光市場を分割し、温泉観光に新たな競争をもたらす。もし龍勝温泉が独自の商品を開発し、

集客力を強化できなければ、強い競争力を持つことは難しい。

3 おわりに

本論では、SWOT 分析方法を使い、桂林龍勝温泉観光開発の長所・短所・機会・脅威を分析した。そして、桂林龍勝温泉における観光開発について観光商品の単一さ、観光産業の従業員養成教育の少なさを問題点として明らかにした。

今後、観光ブームの持続性と発展性を見据えた場合、これらの短所や脅威をいかに解決し、克服していくかが大きな課題であり、長所を生かしながら温泉観光の可能性を模索していくことが関係者に与えられた責務となろう。

温泉観光地の生態系の保全は、最も重要である。自然や環境の保全は温泉観光地にとって最も重要な条件であり、温泉地での保養が不可欠となっている。そのために、観光スポットの開発建設は環境保全を優先し、実用性と合理性とを同時に配慮すべである。

龍勝温泉観光地には森林及び天然の温泉水源があり、さらにこの地域には滝・溪流・山・谷など自然資源や原始的動植物資源もある。これらは、すべて再生できない天然資源であるので、一旦破壊されると再生できない。しかし現在、観光開発によって温泉源の近くに建造物が数多く建設されたり、飲食店などが過剰となっていることが問題化している。建造物の建設に際しては自然環境及び原生林・原生植物を保全すべきであり、道路は地形の原型を少なくとも変容させずに建設すべきである。建造物の外部の色も周辺の自然環境の色に合わせるべきである。開発しない緩衝地帯の保留は必要であり、将来において観光地の開発及び発展に余地を残すことは大切なことである。

参考文献

- 周誠之編（1846）：『龍勝庁誌』卷三 興地誌 清道光26年
- 桂林理工大学観光企画設計院（2007）：『桂林龍勝県観光発展企画書』
- 龍勝県観光局（2008）：『2007年度龍勝県観光報告書』
- 龍勝県人民政府（2008）：『貧乏脱出政策の推進政策』桂林観光ネット（www.glhsh.com）
- 陳夢醒（2009）：「広東温泉観光日の設立」新華ネット 2009年10月25日
- 桂林江山国際旅行社の専用サイト 2010年

海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅲ

Consideration of Similarity and Bathing Culture between Sea Bathing, Sea Water Hot Bathing and Hot Spring, Ⅲ

進 藤 和 子*

Kazuko SHINDO

キーワード：潮湯 (sea hot bathing:sioyu)・海水浴 (sea bathing)・

海水温浴 (sea hot bathing)・温泉 (hot spring)・

療養所 (sanatorium)・医学療法 (medical care)

1 はじめに

潮湯(海水温浴・冷浴)は、温泉と同様な浴感と効果を持つ入浴方法として、京都の公家達が海水を都まで運ばせ温め、湯治やもてなしに使用したといわれ、主に瀬戸内海に面した中国・四国地方や九州の島などでは潮湯の入浴風習が見られる。筆者はこうした風習が神話の時代より現在まで続いている事を述べてきた¹⁾。今回は主に関西より西に多く見られた潮湯が、東北地方から九州まで一斉に広まった明治中期に着目し、日本の海水浴場の開設時期と近代医療の治療法として内務省衛生局が指導した温泉と海水浴(温浴・冷浴)に密接な係わりがあると思われるの考察した。

2 研究の目的と方法

本稿では今までの調査研究を引き続き行い、潮湯と温泉の類似点とその入浴文化について明らかにすることを目的とした。海水温浴と潮湯の表記の使い分けは従来通りとする。今回テーマにした明治期に、海水浴という言葉が一般に使われるようになったが、今日のように泳ぐ海水浴ではなく、温浴(潮湯)が含まれている点が重要である。ここでは、海水浴(温浴・冷浴)という表記に従うが、

伝統的入浴文化の場合は潮湯と表記した。

3 西洋医学が広めた潮湯

(1) ベルツ・松本順・長与専斎と温泉・海水浴(冷浴・温浴)

明治以前には、温泉は入浴することで生じる癒し効果とともに、病を治したり軽減するという民間療法の手段、および湯治などの生活の知恵として利用されてきた。海水浴(温浴・冷浴)においても、温泉と同様な効果をもたらすとして、狭い地域であるが様々な形で行われていた²⁾。明治になり、欧米文化を一気に取り入れる政府の方針が定まって、異国の入浴文化を知ることにもなった。1871(明治4)年から翌年にかけて欧米を視察訪問した岩倉使節団の見聞からも、医療・予防医学・衛生面などを重視した温泉と海水浴(温浴・冷浴)の利用が推奨されるようになった。

これに貢献したのが、ドイツ人医師で東京医学校(現東京大学医学部)教授でもあったエルヴィン・フォン・ベルツ(1849~1913年)である。ベルツと並び、注目すべき人物として初代陸軍軍医総監の松本順(1832~1907年)と内務省衛生局初代局長・東京医学校校長の長与専斎(1838~1902年)が

*雑誌ライター (Magazine Writer)

あげられる。松本順と長与専齋は共に、江戸末期に長崎でポンペから蘭法医学を学び、長与は岩倉使節団の一員として欧米の医療事情や海水浴場を視察している。

3者とも西洋医学の医師であり、近代国家へと歩みを始めた日本社会の衛生常識を向上させ、当時流行したコレラや結核などの治療を行った。さらに、予防医学の面でも温泉や海水浴（温浴・冷浴）を利用すべきだと唱え、日本の医学の発展に関して中枢をなした人物といえる。

海水浴（温浴・冷浴）については、内務省衛生局が1881年に発表した『海水浴説』が発端となって、各地に海水浴場開設の動きが現れる。それ以前にも、外国人が1872年神奈川県片瀬海岸、1873年同県腰越村、1875年同県富岡海岸で海水浴をした記録が残っている。また、1880年兵庫県明石海岸で大阪鎮台の兵士が脚気の治療のため海水浴を行った。神奈川県富岡海岸では料亭と海の家を兼ねた潮湯のある「海宝桜」という海水浴旅館が開業するなど、その効果を取り入れようとする気運が日本人の間にも出始めた。海水浴の社会現象には、ベルツ・松本順・長与専齋の影響が大いにあると推察でき、政府のお墨付きと西洋文化が広まるなかで、鉄道が開通すると瞬く間に全国に広がっていった。

ベルツは1880年に日本の温泉に関する意見書を明治政府に提出した『日本鉱泉論』³⁾は、この原稿を一般向けに出版したものである。日本での治療の体験から「気候療養所がまだない」「箱根・草津・伊香保でもよいのだが、しかし医者がない」と自らの日記⁴⁾にも書いている。『日本鉱泉論』のなかで「泉水の効能の外更に尤も大切なるは気候なり」と述べており、温泉医の必要性和気候療法が、豊富で有効な多くの温泉を持つ日本の温泉地を発展させる要素になると述べている。

『日本鉱泉論』のなかで、伊香保を例にして「第一、温泉場を建築するには格別に其結構に注意すべき事。第二、飲用泉源に至る険

難道路の改良に注意すべき事。第三、通行自由の場所に泉源を導き且つ之を石円柱に導くべき事。第四、遊歩場を設くべき事。但成たけ日光直射せざるの地を撰び己むを得ざるときは樹木を植ゆるべき事。第五、市街警察及び掃除等の諸事に注意する事。第六、療養所を設立すべき事。第七、成たけ導水管を建設すべき事。第八、毎年晴雨学上の表を作るべき事。之に属する器機は即ち晴雨器、寒暖計、検冷器、湿器及び検風器を備置く事」と述べ、この立案を伊香保が遂行すれば日本の温泉場の手本になり、温泉利用方法が一新されると提案している。

また海水浴に関しても、政府の高官に頼まれて海水浴場開設の場所を探しに江ノ島から鎌倉に出かけたり、鍋島侯の子供を片瀬に海水浴に行かせる⁵⁾などしている。

長与専齋の『海水浴説』、松本順の『海水浴概説』については先に述べた⁶⁾ので、1886（明治19）年に編まれた内務省衛生局編・長与専齋の監修となる『日本鉱泉誌』のなかの海水浴（温浴・冷浴）を検討する。ここでも、空気の正常な地域や山間部、海浜へ転地する気候療法が温泉療法の一部とされ、そのなかに海水浴が含まれている。例をあげると、「腺病に於いては多く食塩を含める空気を有つ海浜に（中略）海水浴を行うを要す」「萎黄病・貧血病・水血病に於ては多くの森林繁茂して甚だ高からざる土地又は海浜にて（中略）海水浴或は沙浴を用いるを以て可とす」などと、海水浴の症状別の項目に海水浴の活用の方法を記している。

松本順は『ワートル薬性論』⁶⁾に記されている海水浴に興味を持ち、その意味をポンペから教授され、自ら健康法・治療法として実行⁷⁾した。長年海水浴場を開設したいと思いつつ、1886年に医師の指導を受けられる旅館がある海水浴場を大磯に開設した。また、温泉の治療効果も宣伝し、長野県湯田中温泉の大湯には松本順が医治効用を記した入浴法の看板が掲げられ、福島県飯坂温泉では温泉

療法の重要性を説き、鯉湖の湯などの看板を揮毫した額が今も残っている。

以上のように、明治の幕開けから30年余りの間、3者はその著作や日常の職務や指導などを通じて、温泉と海水浴（温浴・冷浴）を病を持つ政府の高官には治療法として勧め、一般人にも効能を生かすための正しい入浴法を教えるなどして広めていった。

(2) 鉄道開通と海水浴場

海水浴場は鉄道の開通とともに全国に普及した。表1に明治期の鉄道開通年、表2に全国の海水浴場数を示した。

鉄道は1872年に新橋～横浜開通して以来、1887年に横浜～国府津、1889年新橋～神戸（東海道線全線）など次々に開通した。1892年には全国鉄道名所案内が出版され、鉄道移動による行楽が始まり、主な目的地として温泉地と海水浴場が宣伝された。

海水浴場の数をみると、明治時代の公式記録は未確認であるが、民間の出版物である『全国鉄道名所案内』⁸⁾では全国で31カ所となっている。『日本転地療養誌』⁹⁾では104カ所に増えている。

その後、次々と発行された行楽案内書の海水浴の説明では、『海水浴説』『海水浴法概説』に示された内容を踏襲し、海水浴は海で泳ぐ冷浴と海水を温めて入浴する温浴を、時季・症状・年齢・性別・医師の指示によって使い分けるように指導している。したがって、主な海水浴場に造られた旅館や休憩施設には、温浴場（潮湯）が、かなりの数設けられたと考えられる。表2をみると、『日本転地療養誌』では全国の海水浴場は103カ所あり、そのうち温浴設備の表記があるのは三重県3、大阪1、兵庫1の計5カ所であった。

寺田寅彦の『海水浴』という随筆には、「父に連れられ明治14年の夏知多郡の大野とかいうところへ塩湯治に行った。（4歳だった私に）海水浴をさせようとするのとひどく怖がって泣き叫んでどうしても手に合わないの、仕方なく宿屋で海水を沸かした風呂を立

表1 鉄道開通年表

開通年	開通区間
1872 (明治5) 年	新橋—横浜
1877 (明治10)	神戸—京都
1883 (明治16)	上野—熊谷
1887 (明治20)	横浜—国府津 水戸—小山
1889 (明治22)	新橋—神戸 大船—横須賀
1891 (明治24)	上野—青森 門司—熊本
1894 (明治27)	神戸—広島
1896 (明治29)	上野—水戸
1900 (明治33)	大阪—福地山

(注) 主な開通のみ。

表2 明治期の海水浴場数

年 県名	1892年 (明治25)	1910年 (明治43 年)
北海道		4
宮城	1	1
茨城	1	2
千葉	1	11
東京	1	2
神奈川	11	16
静岡	5	17
愛知	3	2
三重	2	4
福井	—	6
富山	—	1
和歌山	—	2
京都	—	5
大阪	2	6
兵庫	3	8
岡山	—	1
広島	—	1
香川	—	5
大分	1	—
佐賀	—	1
長崎	—	5
宮崎	—	2

(注) 1892年『全国鉄道名所案内』（一部明治28年版を含む）と『日本転地療養誌』により筆者作成。

てもらってそれで毎日何度も温浴させた」とある。幼児だった寺田寅彦が、医師の勧めで海水浴に連れて行ってもらった情景を思い出して書かれた一文である。

また、筆者の調査によれば、宮城県の菖蒲田浜海水浴場にあった大東館は、1888年に開業しており、その案内書に潮湯のことが明

記されている（資料1）。

鎌倉に長与専斎が建てた海浜院にも潮湯があったが、大手新聞の記事になったにもかかわらず、多数の旅行案内書は入浴設備の内容については触れていない。筆者は多数の潮湯を持つ施設が、この時期に造られたといて間違いないと仮定し、現在調査を進めている。



資料1 海水浴の効能・温浴の案内書（1888年）

4 医療の場として設けられた入浴施設

(1) 噓気館・鎌倉海浜院・禱龍館

温泉地の繁栄をもたらした、海水温浴（潮湯）を全国的に広めた根底に、ベルツが発表した『日本鉱泉論』で提唱されている医師の指導のもとに環境の整った気候療養施設で入浴療法を行うという点がある。このことを実践したのは松本順と長与専斎でもあった。両者はベルツの指導だけでなく、日本の医師達に先がけて蘭学を学び、ヨーロッパの温泉や海水利用施設の知識もあった。実際に、その思いを実現した施設が噓気館・鎌倉海浜院・

禱龍館であった（写真1～3）。

1885年に静岡県熱海に温泉利用の「噓気館」（岩倉具視発案・長与専斎監督）、1887年に海水浴利用の神奈川県鎌倉の「海浜院」（長与専斎発案監督）、大磯の「禱龍館」（松本順発案監督）と相次いで開業した。この3つの施設は、医師の指導のもと入浴や気候を活用して疾病の治療軽減、予防をする当時としては先進医療施設として造られた。建設にあたって、噓気館・鎌倉海浜院の資金提供は横浜の豪商・茂木惣兵衛、禱龍館は地元有志に負うところが多かった。

噓気館は、熱海の大湯の前に造られ、湯治



写真1 熱海大湯噴湯



写真2 鎌倉海浜院



写真3 大磯禰龍館

(注) 大磯町郷土資料館による。

客が通って温泉吸入などをして治療を行う場所として開設された。熱海はベルツが1879年に浴場建設の候補地として下見に訪れている場所でもある。ベルツは岩倉具視の主治医でもあり、監督の長与専斎と関係が深いことから、文献にはないがベルツの意見も入れられていると推測される。『熱海鉱泉誌』¹⁰⁾によると、「湯の中央には噓気(吸気)に要する機器を備へ大湯沸騰の度毎に其蒸気を室内に

導き吸入せしむ又雨浴びあり尋常浴室あり……館内に浴医局及びび温泉取締所を置き」などの記述があり、当時は噴泉していた大湯の温泉を利用して吸入、雨のように温泉を降らせ浴びる、普通に入浴するなどの設備を整えた施設であった。入浴に当たっては医師の診察、施設の衛生面での管理、気候・体重計など測定器の機器の完備、入浴法の指導などがあり、ヨーロッパの入浴施設を模倣した感がある。また、熱海梅林は噓気館の治療プログラムの1つである散歩のために造られたことも書かれてある。

この本には、海水浴の項目がある。松本順が熱海で海水浴場開設を説いた際に同意しなかったが、1885年に大磯に海水浴場が開設され、5年後には熱海にも海水浴場があった事やその効能が記されている。宮内庁直轄の療養施設であった噓気館は、1891年に温泉宿営業者一同に下付され、1920(大正9)年に焼失するまで運営されていた。

鎌倉の海浜院については、長与専斎が鎌倉海浜院創立趣意書に「海水は天地間の一大鉱泉にして……本邦古来海気海水を利用するの道を知らず。近年偶々海水浴場の設あるも単に海水に游泳し或は之れを温浴に供するに止まり、家屋の構造より食料の品質、運動の緩急、時間に至るまで真正の学理に基づき海気療養所の性質を具へたるものあるを聞かず」と述べている。この一文から、海水を鉱泉として認め、海気海水を療養に正しく使うべく海浜院を設立した趣旨が分る。この海浜院は目の前に由比ガ浜海水浴場があり、館内の風呂にはボイラーで沸かした湯と海水を給湯し、湯瀧もある西洋式ホテルであった。しかし、規則が厳しく宿泊料も高価だったため、設備はそのままに翌年には海浜ホテルとして営業形態を変えた。何度か経営者が変わるが、内外の著名人が宿泊し、その後進駐軍に接収され1945年12月に本館、翌年1月に別館が米兵の過失により焼失した。海浜院としては1年と理想の療養施設にはならなかった

が、各地の海浜院の設立のきっかけとなったといえよう。

大磯の照ヶ崎に1885年に開設した海水浴場は、1887年の鉄道開通により活気を帯び、海浜には温浴施設を備える旅館が立ち並んでいた。同年に開業した松本順が保った禱龍館は部屋数50余り、医院としての診療活動を行う病院の機能を重視した旅館であった。病院や医師も少なく、民間の病気に対する意識も低く、高額の治療費を支払えない者も多かった当時、病気にかからないための予防医学として海水浴（温浴・冷浴）を指導し、無料診察の救済措置を設けていた。しかし、一般の遊客には使いにくい面もあったらしく、利用客が減ったものの経営形態を変えて賑わいを取り戻したとされる¹¹⁾。

5 まとめ

近代になって、温泉についての案内書として、効能・泉質・入浴法などの科学的な分析や医療効果を解説した出版物や、各地の温泉地を紹介した旅行案内書など、多数出版された。これらの基準となるのは『日本鉱泉誌』であると考えられる。これは1881年にドイツで行われた万国鉱泉博覧会に出品するために全国の温泉の分析を行った結果を基に編纂された。海水浴についての記述が多いことは前述したが、現在では成分条件は充たしているものの温泉法の湧出していないという項目に当てはまらないので、海水を温めて入浴する海水温浴は温泉としては認められていない。

海水浴（温浴・冷浴）が何時頃まで温泉の範疇になっていたのだろうか。筆者が確認できる範囲では、1932年発行の西川義方『温泉と健康』、1938年の藤浪剛一『温泉知識』に、温泉と並んでその効能が書かれている。このことから推測すると、1948年に温泉法

が公布されて以降は、温泉と海水浴（冷浴・温浴）が切り離されたと考えたい。温泉気候温泉物理という名称は継承されているが、この中に含まれていた海水浴（温浴・冷浴）は置き去られてしまっている。

また、潮湯（海水温浴）が温泉の範疇から離れた一因として、医学的治療に役立つとして、医師の診察や栄養管理・運動などを盛り込み、医学的に活用しようと造られた海浜院などの施設が長続きしなかったのは、海水浴（温浴・冷浴）の娯楽性が人々に早い時期に浸透して、泳ぐ、入浴する快楽が優先された事が考えられる。この点でも、潮湯が温泉の範疇から外れた要因ではないかと思える。

今後の課題としては、江戸以前の潮湯文化の検証、現在までの潮湯旅館の調査など行い、潮湯を多方面から明確にしていきたい。

注・参考文献

- 1) 進藤和子 (2008) : 「海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅰ」温泉地域研究、第11号、21～26頁
(2009) : 「海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅱ」温泉地域研究、第13号、47～52頁。
- 2) 前掲1)
- 3) ベルツ (1880) : 『日本鉱泉論』中央衛生会。
- 4) ベルツ (1880) : 『ベルツの日記』岩波書店版、84・110・111頁
- 5)・7) 前掲1)
- 6) 林洞海訳 (1856) : 『ワートル薬性論』。
- 8) 野崎左文 (1892・1895) : 『全国鉄道名所案内』関東の部、関西の部。
- 9) 長尾藻城 (1909) : 『日本転地療養誌』。
- 10) 青木純造編纂 (1890) : 『熱海鉱泉誌』。
- 11) 大磯町郷土資料館 (2007) : 『大磯の蘭囃』大磯町郷土資料館、10頁。

書評

布山裕一著：『温泉観光の実証的研究』

御茶の水書房 339頁 2009年4月

定価[本体5,000円+税]

『温泉観光の実証的研究』は、第1部・温泉観光論、第2部・温泉観光の実態とからなる。著者は、長年にわたって、(社)日本温泉協会に勤務し、仕事柄、温泉及び温泉地に実際に接し、そうした経験や体験が本書全般に溢れていると言っても過言ではない。タイトルの実証的研究には意味があって、すべて自分の見聞・調査がベースとなっており、まさに実証的研究と言えよう。著者は法学部出身であり、研究姿勢は法制と行政の観点で、観光・まちづくり・景観などについても、その実態を明確にしようとしている。

本書の構成は、第1部の温泉観光論と第2部の温泉観光の実態からなる。実態で取り上げた温泉地は、秋の宮・磐梯熱海・草津・箱根・下呂・有馬・黒川温泉などである。

全体構成としては、第1部と第2部を合わせて14章からなり、第1部は温泉観光全般、第2部は温泉観光地の実態究明に努めている。第1部では、第3章と第4章がユニークである。いずれもアンケート調査の分析であり、こうした実証的研究は著者固有の研究態度であり、評価できよう。アンケート調査を解読すると、消費者の温泉志向性として、温泉そのもの・自然環境・温泉情緒・やすらげるの4項目がそれぞれ40%を超え、支持を集めている。本書では、その他の調査結果も沢山掲載しており、データからも今後の温泉地の方向性が読み取れる。

第2部は、温泉観光地の実証研究であるが、温泉地の選定に著者なりの創意工夫が見られる。いずれの温泉観光地も、一般読者から識者に至るまで、その実態や今後の方向性を知りたい温泉観光地であり、特に、秋の宮温泉郷・磐梯熱海温泉については、これまで

の調査事例が少ないので、報告の価値は実に高い。草津・箱根・下呂・有馬・黒川は、現在では、日本を代表する有名温泉地であり、誰もが歴史的背景から最新の情報に至るまで知りたい温泉地である。東北日本から西南日本に至るまで、バランスよく温泉地をリストアップし、著者の配慮が読み取れよう。

主な構成は、概況・発展過程・観光動向・観光資源・温泉地づくりがキーワードとなっており、同一の視点での調査・分析に特色がある。しかし、せつかくの温泉及び温泉地に関する著作なので、出来れば、温泉の資料写真・温泉地の景観写真・温泉地の地図などが欲しいところである。そうなると、本書の理解は一層深まると確信するものである。今後の課題としたい。

本書は、専門的な研究書の範疇に入るが、文章は読みやすく、理解しやすい。「あとがき」には、「温泉地という地域で育まれてきた文化や地域性を根底に、よりより温泉地を目指して、「温泉地づくり」を進めていくことが地域の活性化につながっていくと考えている。」とあるように、著者の研究課題は、温泉地づくりと地域の活性化であり、今後の著者の研究活動に期待したい。本書は、温泉及び温泉地に興味を持つ一般読者や学生に限らず、温泉ファンやマニア、さらには温泉及び温泉地の関係者・行政関係者・研究者などにも広く薦める一冊である。本書のキーワードは、法制・行政・観光・まちづくり・文化・景観などであり、温泉並びに温泉地関連の図書の中で、こうしたキーワードを持つ文献は意外と少ないと思う。一読をお薦めする。

(浦 達雄)

温泉地情報

西伊豆の温泉地

— 宇久須温泉 —

新田時也 (東海大学)

1 はじめに

本小論で取り上げる「宇久須温泉」であるが、「宇久須」は「うぐす」と読み、その名は「大楠」、「小楠」に由来すると言われている。地域の「宇久須神社」(祭神：積羽八重事代主命)は、クスノキを祭祀としている。

宇久須温泉は、土肥と堂ヶ島にはさまれた「知る人ぞ知る」的な温泉地である。そこに筆者は魅力を感じているが、泉質や景観にも魅力がある。宇久須は温泉地というよりも、珪砂を材料としたガラス工業の町であり、海浜キャンプ場でにぎわうマリリゾート地である。温泉を有する大型宿泊施設は、「西伊豆クリスタルビューホテル(旧西伊豆ホテルニュー岡部)」のみであり、ほかには小規模の民宿が点在している。

2 宇久須温泉の歴史と現状

ガラス工業の東海工業(株)は、旭硝子(株)が100%出資する子会社として、1938(昭和13)年に静岡県賀茂郡賀茂村宇久須に設立された。東海工業は、裏山から取れる伊豆の珪砂を利用して、板ガラスの製造を開始し、現在に至っている。そのガラスの原材料である珪砂を地域おこしに利用しようと、2001(平成13)年から地元の有志によって、「かも風鈴」の製造・販売が始められた。筆者は数年前であるが、賀茂村がまだ西伊豆町に合併する以前、当時の賀茂村観光協会の方々が、エスパルス・ドリームプラザ(静岡市清水区)の地域産品販売コーナーで「かも風鈴」の展示・販売を行っていたことを記憶している。

宇久須温泉の遊離成分には、メタケイ酸が

25mg/kgほど含まれているのが特徴である。2010年4月、宇久須を訪れた際、浅賀靖氏(前賀茂村社会教育委員)から、地元では「赤川」と呼ばれ、珪砂で赤褐色に染まった川を紹介していただいた(写真1)。浅賀氏によると、「赤川」は魚が住むことのできない「死の川」とのことである。「赤川」は宇久須川に合流するが、そのそばに「明泉禅寺」がある(写真2)。明治の終わり頃に、この禅寺の裏池から「ぬくとい(温かいという静岡弁)水」が湧き出していたという。現在、その池は埋められていて、当時の様子はうかがえない(写真3)。「ぬくとい水」は、温泉であったのであろうか。残念ながら、禅寺に伝わる古文書は火災によって失われてしまい、「ぬくとい水」が湧き出していた事実は、浅賀氏の尊父(故人)からの言い伝えとのことである。浅賀氏はすでに八十路を越えられた方(宇久須の名主出身)で、尊父が若い頃の明治の話を知っていたという。

宇久須の西伊豆町宮温泉には、1963年に利用が開始された「深田源泉」(西伊豆クリスタルビューホテル)と、1990年に竹下内閣の「ふるさと創生」1億円で整備した「浪入源泉」(ふくしの湯)の2つがある。明治末に明泉禅寺から「温泉」が湧き出していたのであれば、明泉禅寺の「温泉」は、宇久須温泉の中でも古い時代のものと言えよう。おそらく、珪砂の流れる「赤川」のそばに、この禅寺は位置しているので、「ぬくとい水」の話は、間違いではないのではなかろうか。この禅寺は、もとは真言宗石水山観音寺であり、室町時代に臨濟宗建長寺派の禅寺として、現

在地に移されたという。「明泉」という名は「温泉」を表し、それは、室町時代のころに現在地で温泉が湧いていたために名づけられたのであろうか、この点が課題として残る。

その明泉禅寺から車で数分のところ、やはり赤川の近くに「^{しんた}神田神社」がある(写真4)。浅賀氏によると、この神社の祭神は「走湯」であり、伊豆山神社の流れを持つという。伊豆にある神社なので、伊豆山神社の流れを持つことは不思議ではないが、明泉禅寺の近くにあること、「赤川」と合流して宇久須川となるもう一方の川のそばにこの神社があることなどから、明泉禅寺や神田神社の一带が、かなり古い時代の宇久須温泉の中心地であったのではないかと、現在では、宇久須川中流域にある宇久須神社が宇久須の中心的な神社として紹介されており、かつては上流の地域が宇

久須の温泉として栄えていたのではなかろうかと、著者は想像している。

3 考察

宇久須温泉について、可能な範囲内で調査したが、たしかな記録としての文献には出会えていない。言い伝えの証言が中心であって、昭和30年代に、空中探索で温泉脈を見つけようとしたが、結局は失敗したこと、そのかわりに、ふるさと創生で堀削したこと、という程度である。たしかな文献には出会えていないが、明泉禅寺や神田神社の位置関係や祭神などから、前述のように推測することができよう。ひかえめな宇久須温泉であるからこそ、ほとんど手付かずの歴史を掘り起こしていくことが、今後の魅力的な課題となろう。



写真1 赤川



写真2 明泉禅寺



写真3「ぬくとい水」が湧き出していたという埋め立てられた池



写真4 神田神社
(注) 写真1～4は筆者撮影。

日本温泉地域学会会員温泉関係文献目録

日本温泉地域学会では、先に会員の温泉関係業績の内、著書3点以内、論文・報告5点以内の提出をお願いしましたが、下記の回答がありましたのでここに掲載します。また、学会に寄贈された著書なども掲載しました。なお、学会誌『温泉地域研究』の文献目録は、創刊号から第10号までは、第10号に掲載しています。会員各位の参考としていただければ幸いです。

日本温泉地域学会

阿岸祐幸

著書

阿岸祐幸・飯島裕一 (2006) : 『ヨーロッパの温泉保養地を歩く』岩波書店、162頁。

同 (2009) : 『温泉と健康』岩波書店、203頁。

安達清治

著書

安達清治 (2009) : 『近代の作家と温泉』近代文藝社、109頁。

飯島裕一

著書

阿岸祐幸・飯島裕一 (2006) : 『ヨーロッパの温泉保養地を歩く』岩波書店、162頁。

飯島裕一 (1998) : 『温泉の医学』講談社、231頁。

石井宏子

著書

石井宏子 (2007) : 『温泉ビューティ』グリーンキャット、142頁。

同 (2009) : 『だから行きたくなる 温泉セラピーの宿』集英社、175頁。

同 (2009) : 『癒されてきれいになる おひとりさま温泉』朝日新聞出版、111頁。

石川理夫

著書

石川理夫 (2001) : 『温泉で、なぜ人は気持ちよくなるのか』講談社プラスα新書、240頁。

同 (2003) : 『温泉法則』集英社新書、224頁。

同 (2006) : 『温泉巡礼』PHP研究所、256頁。

論文・報告

石川理夫 (2007) : 「温泉資源保護をめぐる各都道府県の現状と取り組み」温泉地域研究、第8号、9~18頁。

同 (2008) : 「「箱根七湯」における歴史的「惣湯」について」温泉地域研究、第10号、29~40頁。

同 (2008) : 「温泉の癒し・ケアの力と地域共同性」季刊at、第13号、43~59頁。

同 (2008) : 「温泉開発はまちづくりに活かされたか-ふるさと創生温泉事業の経験から」月刊自治研、2008年2月号、49~56頁。

同 (2009) : 「温泉地における共同湯の意義の再評価-惣湯考察を受けて」温泉地域研究、第12号、1~12頁。

池永正人

論文・報告

- 池永正人 (2009) : 「雲仙地獄の観光資源性」温泉地域研究、第12号、13～20頁。
同 (2010) : 「雲仙古湯地区のファサード整備」温泉地域研究、第14号、29～34頁。

井上晶子

論文・報告

- 井上晶子 (2009) : 「飯坂温泉における空間の変化と場所のイメージ」温泉地域研究、第13号、21～32頁

印南敏秀

著書

- 印南敏秀 (2002) : 『石風呂民俗誌—もう一つの入浴文化の系譜』山口県東和町(現周防大島町)、447頁。
同 (2003) : 『共同浴の世界』あるむ、72頁。

論文・報告

- 印南敏秀 (2005) : 「温泉のフォークロア (1)」愛知大学総合郷土研究所紀要、第50号、115～128頁。
同 (2006) : 「温泉のフォークロア (2)」愛知大学総合郷土研究所紀要、第51号、57～70頁。

于航

論文・報告

- 于航 (2005) : 「中国遼寧省鞍山市湯崗子温泉の発達過程と温泉利用」千葉大学地理学研究報告、第16号、31～42頁。
同・山村順次 (2005) : 「中国大連龍門湯温泉の開発と温泉利用」温泉地域研究、第5号、31～40頁。
于航 (2006) : 「中国の温泉文化について」温泉地域研究、第6号、49～54頁。
同 (2007) : 「中国大連市安波温泉の開発過程」温泉地域研究、第9号、31～40頁。
同・山村順次 (2008) : 「中国大連市安波温泉の開発に対する地域住民の評価」温泉地域研究、第10号、63～72頁。
同 (2008) : 「中国東北地方における農村温泉地の地域的展開」千葉大学地理学研究報告、第19号、31～40頁。

内田 彩

論文・報告

- 内田 彩 (2007) : 「江戸時代後期の湯治場における交流」第13回観光に関する研究論文入選論文集、財団法人アジア太平洋観光交流センター、49～50頁。
同 (2007) : 「近世後期の温泉地における長期滞在の生活スタイルに関する研究」日本観光研究学会第22回全国大会論集、229～232頁。
同 (2009) : 「我が国の湯治文化とその歴史」新・湯治のすすめ、NPO法人健康と温泉フォーラム、47-51頁。
同 (2009) : 「複数の温泉地を周遊する旅行者の行動—江戸後期の箱根温泉郷を事例として—」温泉地域研究、第13号、11～20頁。
同 (2009) : 「湯治場の交流—「温泉の場の交のごとし」と称された人と人のふれあい—」交流文化、立教大学観光学部、第9号、4～11頁。

浦 達雄

著書

- 浦達雄 (2001) : 『別府八湯湯遍路日記』 クリエイツ、58頁。
同 (2006) : 『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』 クリエイツ、218頁。
観光学研究所編・浦達雄他 (2009) : 『温泉の正しい理解と温泉地の活性化』 大阪観光大学観光学研究所、103頁。

論文・報告

- 浦達雄 (2008) : 「別府温泉における小規模旅館の経営動向」 大阪観光大学紀要、第8号、1～8頁。
同 (2008) : 「別府温泉における行政の観光地域づくりー第2次世界大戦後を事例としてー」 温泉地域研究、第10号、53-62頁。
同 (2008) : 「別府八湯温泉道の意義」 温泉地域研究、第11号、13-20頁。
同 (2009) : 「城崎温泉における小規模旅館の経営動向」 大阪観光大学紀要、第9号、1～9頁。
同 (2009) : 「最近の和倉温泉における小規模旅館の動向」 温泉地域研究、第13号、33～40頁。

大山琢央

論文・報告

- 大山琢央 (2006) : 「熊本県山鹿温泉の地域変容ー山鹿市営温泉「さくら湯」の改変問題を事例にー」 温泉地域研究、第6号、13～20頁。
同 (2006) : 「他者との比較から見る蒸し湯の特性ー熊本県山鹿温泉「さくら湯」の事例からー」 蒸し湯つちなんなんー蒸し湯の学術調査報告書、一遍上人探究会・別府大学文化財研究所、15～20頁。
同 (2007) : 「近代における別府鉄輪温泉の諸相」 史学論叢、第37号、1～15頁。
同 (2008) : 「近代における熊本県山鹿温泉の形成過程」 温泉地域研究、第10号、41～52頁。
同 (2010) : 「熊本県菊池温泉の開湯に関するエピソードの利用と展開」 温泉地域研究、第14号、9～18頁。

金井雅之

著書

- 金井雅之編 (2009) : 『米沢市三沢地区の地域づくりに関する学術調査報告書』 山形大学地域教育文化学部社会調査士課程。

論文・報告

- 金井雅之 (2007) : 「宿泊施設の経営努力による経営改善効果」 温泉地域研究、9号、1～10頁。
同 (2008) : 「温泉地のまちづくりを支える社会構造」 社会学年報、37号、83～91頁。
同 (2008) : 「旅館経営における社会関係資本の効果——仲介性と閉鎖性の比較」 籠谷和弘編『市民活動の活性化支援の調査研究——秩序問題的アプローチ』 平成17～19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、37～53頁。
同 (2008) : 「温泉地の旅館経営における二つの方向性——〈資本力〉と〈おもてなし〉の複合因果に関する計量分析」 山形大学紀要 (社会科学)、38巻2号、107～128頁。

同・小池幸子 (2010) : 「旅館ネットワーク上の位置と旅館経営」温泉地域研究、14号、～頁。

久保田美穂子

著書

久保田美穂子 (2008) : 『温泉地再生』学芸出版社、207頁。

小堀貴亮

論文・報告

山村順次・小堀貴亮 (2000) : 「東京周辺における日帰り温泉地の地域的展開」観光研究、第12巻第1号、1～8頁。

小堀貴亮・山村順次 (2004) : 「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」温泉地域研究、第2号、49～54頁。

同 (2004) : 「宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化」温泉地域研究、第3号、11～18頁。

同 (2005) : 「国民保養温泉地・四万温泉の地域変容」温泉地域研究、第5号、23～30頁。

同 (2006) : 「高度経済成長期における湯治場の地域的展開」温泉地域研究、第6号、31～38頁。

進藤和子

論文・報告

進藤和子 (2008) : 「海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察」温泉地域研究、第11号、21～26頁。

進藤和子 (2008) : 「海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅱ」温泉地域研究、第13号、47～52頁。

陳 晶

論文・報告

陳 晶 (2008) : 「中国の北京市と広東省における温泉施設の一考察」温泉地域研究、第10号、85～90頁。

陳 晶・何 琳 (2009) : 「中国人の日本温泉に対する意識調査」温泉地域研究、第13号、41～46頁。

長島秀行

著書

長島秀行 (2008) : 『草津温泉－温泉を科学する－』(白倉卓夫編著)「草津温泉の微生物」、上毛新聞社、71～86頁。

同 (2009) : 『温泉図鑑－自然編－』(日本温泉協会編)「温泉微生物」、34～37頁。

論文・報告

長島秀行・浜田真之 (2008) : 「温泉施設における温泉水の簡易測定 (その1) 群馬県四万温泉と岐阜県新平湯温泉」温泉地域研究、第10号、73～78頁。

布施正美・長島秀行 (2008) : 「群馬県草津温泉の湯畑系源泉と万代鉱源泉における水温、pHおよび湧出量の経年変化」温泉科学、第58巻、第2号、99～110頁。

井上源喜・佐藤隆行・長島秀行・杉森賢司・竹村哲雄 (2009) :

「熱水環境中の有機成分の環境地球化学的特徴と起源に関する研究1. 草津温泉源泉堆積物および温泉津温泉源泉堆積物」温泉科

学、第58巻、第4号、217～240頁。

長島秀行・後藤 淳・松井孝夫（2010）：

「群馬県立尾瀬高校と大学とのサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトー群馬県片品川および吾妻川と流域の水質調査ー」
温泉地域研究、第14号、19～28頁。

中山昭則

論文・報告

- 中山昭則（2003）：「大正期における別府温泉の別荘地開発」温泉地域研究、第1号、17～22頁。
同（2005）：「別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合」温泉地域研究、第4号、13～22頁。

布山裕一

著書

布山裕一（2009）：『温泉観光の実証的研究』御茶の水書房、339頁。

論文・報告

布山裕一（2004）：「温泉地の保健的機能の重要性」温泉地域研究、第2号、55～60頁。

浜田眞之

論文・報告

- 長島秀行・浜田眞之（2008）：「温泉施設における温泉水の簡易測定（その1） 群馬県四万温泉と岐阜県新平湯温泉」温泉地域研究、第10号、73～78頁。
浜田眞之（2010）：「国際温泉気候連合横浜大会の開催と意義」温泉地域研究、第14号、35～40頁。

古田靖志

著書

- 古田靖志（2002）：『温泉展ー湯の華からのメッセージー』岐阜県博物館、64頁。
同（2005）：『水と大地のハーモニーー名水・温泉・名勝へのいざないー』岐阜県博物館、87頁。
古田靖志・佐々木信行・山村順次・辻内和七郎・深澤喜延（2005）：
『温泉学入門 ー温泉への誘いー』日本温泉科学会、128頁。

論文・報告

- 古田靖志（2002）：「博物館における温泉の教育普及活動とその意義」温泉、第759号、26～29頁。
同（2003）：「温泉利用者向け泉質名表記の現状と課題」温泉地域研究、第1号、29～34頁。
同（2004）：「温泉の現地観察会の実施とその意義」温泉地域研究、第3号、25～30頁。
同（2004）：「温泉はどのように理解されているか」温泉科学、第54巻第2号、65～74頁。
同（2007）：「温泉文化の普及と博物館における温泉展示」温泉の文化誌・論集、温泉学Ⅰ、353～399頁。

前田 勇

論文・報告

前田勇・姜淑瑛（2004）：「都市型温泉施設の現状と温泉観光地の課題」温泉地域研究、第3号、19～24頁。

- 同 (2006) : 「塩原温泉郷の健康観光地としての可能性」温泉地域研究、第7号、
15～20頁。

八岩まどか

著書

- 八岩まどか (1997) : 『温泉と共同湯』青弓社、198頁。
同 (2002) : 『温泉と日本人』青弓社、228頁。

山村順次

著書

- 山村順次 (1992) : 『草津温泉観光発達史』草津町、552頁。
同 (1998) : 『新版日本の温泉地 その発達・現状とあり方』日本温泉協会、239頁。
同 (2004) : 『世界の温泉地 発達と現状 (新版)』日本温泉協会、271頁。

論文・報告

- 山村順次 (2002) : 「湯治場の現代的意義と課題」総合観光研究、第1号、21～31頁。
同 (2005) : 「温泉地研究論文集」千葉大学大学院自然科学研究科、1～601頁。
同 (2005) : 「温泉資源性と温泉地経営」温泉地域研究、第4号、9～16頁。
同 (2007) : 「温泉資源の観光的利用—山形県と千葉県を例として—」温泉地域研究、
第8号、19～24頁。
同 (2008) : 「国民保養温泉地の地域振興と課題」温泉地域研究、第10号、17～28頁。

学会記事

●日本温泉地域学会第16回研究発表大会

来る11月7日(日)・8日(月)の両日、日本温泉地域学会第16回研究発表大会を「日本三古湯」の和歌山県白浜町白浜温泉で開催します。下記のスケジュールで実施しますので、多くの会員の参加を期待します。

日本温泉地域学会第16回研究発表大会スケジュール

開催温泉地：和歌山県白浜町白浜温泉

開催日：平成22年11月7日(日)～8日(月)

発表会場：ホテルグリーンヒル白浜 TEL. 0739-42-2733

宿泊施設：ホテルグリーンヒル白浜 TEL. 0739-42-2733

懇親会場：同上

視察会集合：11月7日(日)13:30 JR紀勢本線白浜駅前 南紀白浜空港は14:10

受付：11月7日(日)17:30～ホテルグリーンヒル白浜

11月8日(月)9:00～ホテルグリーンヒル白浜

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円

懇親会費：会費5,000円(学生3,000円)。学会指定宿泊施設を利用する場合、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定宿泊施設を利用する場合、懇親会費・朝食込みの1部屋2～3名利用の1人当たり料金は1万2,000円です。

研究発表大会に参加される会員は、下記の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を10月31日(必着)までに前納してください。振込によって学会参加申し込みとします。

また、平成22年度年会費(賛助会員：3万円、一般会員：4,000円、学生会員2,000円)未納の方も同封の振替用紙によって、次の金額にプラスして送金してください。研究発表大会非参加の会員も年会費の送金をお願いします。

学会指定宿泊施設+学会参加：12,000 + 2,000 = 14,000円(学生：13,000円)

懇親会参加+学会参加：5,000 + 2,000 = 7,000円(学生：4,000円)

視察会・学会参加のみ：2,000円(学生：1,000円)

振替口座番号：00190-6-462149

加入者名：日本温泉地域学会

日程

11月7日(日)13:30～17:00 視察会(貸切バス利用) 白浜温泉の見所を視察します。

JR 白浜駅～南紀白浜空港立寄～見晴台～白浜民俗温泉資料館～三段壁～千畳敷～

行幸源泉・崎の湯露天風呂入浴～円月島～とれとれ市場～ホテルグリーンヒル白浜

17:00～18:00 休憩

18:00～20:00 懇親会

11月8日(月)9:30～12:10 研究発表

- 12:10～13:00 昼休み
13:00～13:30 基調講演
13:30～15:00 シンポジウム

交通案内 : JR 東海道新幹線新大阪～JR 阪和線・紀勢本線で白浜駅下車。
航空機は東京～南紀白浜 JAL 便を利用。

研究発表大会プログラム

11月8日(月)

自由論題 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)

座長:長島秀行(東京理科大)

9:30～9:50 王徽(高崎経済大院):スーパー銭湯の伝統的温泉観光地への影響と温泉観光政策転換の必要性

9:50～10:10 池永正人(長崎国際大):雲仙温泉周辺の自然探勝

10:10～10:30 新田時也(東海大):井川の田代温泉を活用したグリーンツーリズムの可能性調査

10:30～10:50 休憩

座長:池永正人(長崎国際大)

10:50～11:10 濱田眞之(国際温泉研究院):ドイツの健康保養地について

11:10～11:30 小堀貴亮(大阪観光大):台湾の烏来温泉の現状と課題

11:30～11:50 浦 達雄(大阪観光大):北京市にける温泉開発

11:50～12:10 張楠・于航・山村順次(城西国際大):中国遼寧省湯泉谷温泉の地域変容

12:10～13:00 昼休み

基調講演

13:00～13:30 中尾 清(大阪観光大学教授):「関西地方の温泉地の動向」

シンポジウム

13:30～15:00 「関西地方の温泉地の現状と課題」

コーディネーター:浦 達雄(大阪観光大学教授)

パネリスト :中尾 清(大阪観光大学教授)

:住木俊之(大阪観光大学准教授)

:小堀貴亮(大阪観光大学講師)

:菊原 博(白浜町観光課長)

- 日本温泉地域学会第15回研究発表大会は、平成22年6月6日(日)・7日(月)の両日、熱海市・熱海市観光協会・熱海温泉ホテル旅館協同組合のご協力を得て静岡県熱海市熱海温泉郷で開催されました。熱海の別荘の起雲閣を発表会場とし、ホテル大野屋社長の 大野茂正氏や NPO 法人エイミック代表の内田実氏などの御尽力のもと、視察会と研究発表会が行われ、会員一同意義のある2日間を過ごしました。伊豆山温泉の伊豆山神社・走り湯源泉、熱海温泉中心部の大

湯間欠泉跡・湯前神社や歴史資料の多い古屋旅館を見学し、温泉施設の「マリンスパあたま」では詳細な説明をいただきました。各位のご好意に厚く感謝いたします。

- 日本温泉地域学会では、先に学会員の温泉関係著書3点、論文・報告5点をお知らせいただくようお願いしましたが、回答のあった会員分と事務局に寄贈された著書について本号に掲載しました。参考になれば幸いです。
- 日本温泉地域学会主催・草津町後援の第7回草津「温泉観光士」養成講座は、9月2日（木）～4日（土）の2日半にわたり、学会員8名の自然・人文・社会科学の専門家による温泉の総合的講義と野外実習が行われました。地元草津町をはじめ、東京都と関東各県などや遠くは兵庫・岐阜・新潟県などから、これまで最高の55名の参加があり、成功裏に終了しました。参加者は男女とも20代から70代までと幅広く、真剣に講義を受け、試験を受け、最終日の野外実習で温泉場を歩き、「温泉観光士」の認定を受けました。こうした企画を長年にわたり継続して支援していただいている草津町当局に御礼を申し上げます。
- 学会誌「温泉地域研究」第16号（平成23年3月末刊行予定）の論文・研究ノート・書評・温泉地情報などの原稿を募集します。投稿希望者は会員名簿に掲載している投稿規程を順守のうえ、2月15日（必着）までに学会事務局へ投稿してください。
なお、次回研究発表大会（5～6月予定）での発表希望者は、3月15日までに発表者名・発表タイトル・内容（100字程度）を葉書またはメールで学会事務局宛に申し込んでください。
- 日本温泉地域学会では、これまでの学会開催記録や学会開催案内などをホームページに掲載しています。日本温泉地域学会で検索すれば、トップに掲載されていますので、ご覧下さい。

日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 () 口
ふりがな 氏 名	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代表者名	印		
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	()	
	FAX	()	
E-mail :			
現住所	〒		
	電話	()	
	FAX	()	
E-mail :			
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

*学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 299-2862 千葉県鴨川市太海 1717

城西国際大学観光学部山村研究室内

日本温泉地域学会事務局

(yamamura@jiu.ac.jp)

電話：04 (7098) 2839

FAX：04 (7098) 2805

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

日本温泉地域学会役員

- 会 長 山村 順次 (城西国際大学)
副 会 長 石川 理夫 (温泉評論家)
理 事 長 濱田 眞之 (国際温泉研究院)
常務理事 長島 秀行 (東京理科大学)
" 辻内和七郎 (箱根温泉供給)
理 事 池永 正人 (長崎国際大学) 市原 実 (元山梨県立大学)
浦 達雄 (大阪観光大学) 甘露寺泰雄 (中央温泉研究所)
菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや) 首藤 勝次 (竹田市長)
只野 公康 (妙見温泉どさんこ) 中澤 敬 (草津町前町長)
布山 裕一 (日本温泉協会) 古田 靖志 (下呂発温泉博物館)
松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館) 森 繁哉 (東北芸術工科大学)
八岩まどか (温泉評論家) 山田 等 (聖徳大学)
由佐 悠紀 (京都大学名誉教授)
監 事 中山 昭則 (別府大学) 谷口 清和 (温泉地活性化研究会)
幹 事 新田 時也 (東海大学) 小堀 貴亮 (大阪観光大学)

任期：2009 (平成21) 年5月25日～2012 (平成24) 年春季大会

温泉地域研究 第15号

2010年9月30日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒299-2862 千葉県鴨川市太海1717
城西国際大学観光学部山村研究室内
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話 04 (7098) 2839

FAX 04 (7098) 2805

振替 00190-6-462149

名義 日本温泉地域学会

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

Journal of Studies on Spa Region

No.15
2010.9

contents

Articles

- Current Business Trends of Small Sized Ryokan(Japanese Style Inn)
in Kurokawa Spa,Kumamoto Prefecture Tatsuo URA (1)
- Present Situation and Problems of Asamushi Spa Kiyokazu TANIGUCHI (11)
- Actual Situation and Problems of Regional Tourism Policies from
Trends of Lodging Guests in Spa
— A Case Study of Yamanashi and Gunma Prefectures —
..... Wei WANG (19)
- SWOT Analysis and Steps of Tourism Development in Long Sheng Spa
near Guilin,China Akira SUZUKI Wei CHEN (29)

Research Note

- Consideration of Similarity and Bathing Culture between Sea Bathing,
Sea Water Hot Bathing and Hot Spring,III
..... Kazuko SHINDO (37)

Book Review

- Hirokazu NUNOYAMA『A Study on Spa Tourism』 Tatsuo URA (43)

News on Spa

- Ugusu Spa in Western Izu Tokiya NITTA (44)

Literatures on Spa written by Members of Regional Science Association

- of Spa, Japan (46)

- Notes and News (52)

Regional Science Association of Spa, Japan

c/o Department of Tourism, Josai International University, Kamogawa 299-2862, Japan